伝えずには
いられない

小樽市日本遺産磨き上げ推進事業　調査報告書

北海道の「心臓」と呼ばれたまち・小樽

～「民の力」で創られ蘇った北の商都～

とっておきの解説集

北海道の「心臓」と呼ばれたまち
OTARU

近代、港と鉄路が整備され物流の
「心臓」といわれた小樽
過去も現在も「民の力」がまちづ
くりを支えてきたかけがえのない
オリジナルストーリー

目　次
Contents

小樽市の日本遺産 …… 2

はじめに・凡例 …… 4

「北海道の心臓」**時系列解説** …… 5

「北海道の心臓」**構成文化財解説** …… 11

「北海道の心臓」
新たなストーリー提案 …… 61

「北海道の心臓」**プロット** …… 71

「北海道の心臓」と**まちづくり運動** …… 89

「文化と生きるまち」
小樽の新たなライフスタイル …… 95

「小樽市の日本遺産・日本遺産候補地域」
構成文化財地図 …… 103

日本遺産で紡がれるまち・小樽

小樽に与えられる３つの日本遺産を学ぶと、
小樽史の骨格がみえてくる！

候補

日本遺産 2021.7.16

北海道の『心臓』と
呼ばれたまち・小樽
～「民の力」で創られ
蘇った北の商都～

小樽独自の
「縦」の展開

官民協働

文 化
観 光

小樽運河保存運動

教 育
寄 附
福 祉
銀 行
商 業
石 炭
鰊 漁
北前船

民の力

認定

日本遺産 2018.5.24

荒波を越えた
男たちの夢が紡いだ
異空間
～北前船寄港地・
船主集落～

全国48市町との「横」のつながり

認定

日本遺産 2019.5.20

本邦国策を
北海道に観よ！
～北の産業革命
『炭鉄港』～

全道12市町との「横」のつながり

～小樽３つの日本遺産たとえ話～
「小樽劇場」開幕

小樽市では、平成30(2018)年に**「北前船」**、令和元(2019)年に**「炭鉄港」**が、それぞれ他の地域と共に日本遺産に認定され、令和3（2021）年には**「北海道の心臓」**が小樽市単独型で日本遺産候補地域に認定されています。日本遺産候補地域とは令和６(2024)年に文化庁が行う本審査にあげられる位置づけです。

そこで、おしなべて小樽の３つの日本遺産を、小樽の歴史を通して振り返ってみると、なるほどと思える構図に見えてきます。

「北前船」は国内48市町を結ぶ航路の一つに小樽が位置づけられ、「炭鉄港」は道内12市町を結ぶ産業近代化ストーリーの一つに小樽が位置づけられることから、「横のつながり」で日本史に貢献してきました。これらに対し「北海道の心臓」は「北前船」と「炭鉄港」の「横のつながり」が礎（いしずえ）となって、小樽独自の発展を遂げた「縦のつながり」と位置づけられます。

こうした構図によって、いよいよ小樽物語「北海道の心臓」が開幕されるのです。

さらに「北海道の心臓」はもう一つ大事な小樽の特長を掲げています。北前船、鰊漁、石炭、商業、銀行、寄附や福祉などはいわゆる「民の仕事」で、この民間活力がまちづくりを牽引してきました。そして昭和後期に勃発した小樽運河保存運動もまた「民の運動」で、小樽を観光の街へ大転換しました。このように小樽は「民の力」で歴史を牽引してきたことが見えてくると同時に、今日の「官民協働」傾向にも影響を与えていることが見えてきます。ということは「北海道の心臓」は今日も未来に向かって紡がれ、終わることのない現在進行形のストーリーといえます。

認定日本遺産である**「北前船」「炭鉄港」**、候補日本遺産である**「北海道の心臓」**を学ぶと、まさに小樽史のダイナミックな骨格が見え、今生きている私たちはもとより、これからの小樽市民にとって、「北海道の心臓」は永遠に紡がれる小樽ストーリーの主役なのです。

はじめに

Storyの和訳は「物語」です。

日本遺産はストーリーを大切にしています。ではストーリーはどのようなときに誕生するのでしょうか。時の刻みや場の移動による変化、上下左右前後斜めなど視点の変化、関係者が抱く意志の変化などによって動きながら紡がれています。

本誌では、より正確性を期すために、年代や名前などの暗記ものも記されていますが、すべてストーリー型編集とし、どこのページを読んでも一つのストーリー仕立てになっており、いわば小樽史の短編集のようなものです。

また史実と史実のつなぎや、史実と現在とのつなぎに際し、脚色や演出を避け、「わかりやすい解釈」としてのストーリー化を心掛けました。

是非多くの人に、あなたの感動とともに伝えていただければ幸です。

～ストーリーとは～

凡　例

- 人名は全て敬称略とさせていただきます。
- 年号は元号と西暦を併記します。
- 令和３（2021）年７月に「日本遺産候補地域」に選ばれた「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽」は略して「北海道の心臓」と表記しています。
- 本誌は「北海道の心臓」の詳細な解説ストーリー集です。
- 「時系列解説」は「北海道の心臓」全体を時系列に解説したものです。
- 「小樽市の日本遺産」および巻末の「地図」は３つ（北前船・炭鉄港・北海道の心臓）の日本遺産を対象としています。
- 「構成文化財解説」は日本遺産候補地域に認定された26種類（39件）の構成文化財を対象としています。
- 「新たなストーリー提案」は、既述の構成文化財が点から線や面へ展開したことに対し、昭和の「民の力」が、点から線や面へ展開したストーリーとしてご提案するものです。
- 「プロット」は「北海道の心臓」のストーリーに関連する市民・観光客の初歩的な疑問に答えています。
- 「まちづくり運動」は構成文化財に影響を与えたまちづくり運動の紹介です。
- 「小樽の新たなライフスタイル」は歴史文化を大切にしながら地域に生きる人々の紹介です。
- 歴史的建造物の名称は令和３年現在の「小樽市指定歴史的建造物」に準拠しています。

＜表紙・裏表紙写真：小樽市・川嶋王志＞

「北海道の心臓」

時系列解説

時系列解説は、「北海道の心臓」全体を時系列に解説しています。

＜写真：小樽市総合博物館 蔵＞

〈眞柄利香撮影〉

市街地の背後に位置する天狗山からまちを一望すると小樽の港とその周辺に広がる全体を見渡すことができます。このまちで青春時代を過ごした小林多喜二は、小樽を「街並が山腹に階段形に這い上った港街で、広大な北海道の奥地から集まってきた物産がそこから又内地(本州)へ出て行く謂わば北海道の『心臓』みたいな都会である」と表現しました。現在も往時の姿を偲ばせている小樽独特の建物とまちなみは、明治以降、物産とともに各地から押し寄せた多種多様な人々の「民の力」によって創られました。

そして昭和後期、全国的に共感を呼んだ「民の力」による小樽運河保存運動を契機に、小樽は一大観光都市に生まれ変わり、新たな血液の循環をつくる「心臓」を復活させています。

色内銀行街＜川嶋王志撮影＞

参考文献
『小樽市歴史文化基本構想』
小樽市教育委員会、2020年
『小樽市の歴史的建造物』
日本建築学会北海道支部
歴史意匠専門委員会編
小樽市教育委員会社会教育部
社会教育課、1994年

港と鉄道の「大動脈」によるゴールドラッシュ

明治44年以後　鉄道と直結した高架桟橋＜小樽市総合博物館 蔵＞

小樽の近代化は鉄道と港からはじまります。明治以降、政府は北海道の資源が日本の近代化に必要不可欠とし、本格的な開発が始まりました。その拠点が小樽でした。江戸時代後期よりニシン漁場として知られていましたが、明治２(1869)年に商船の航行が自由になると北前船の往来が盛んになりました。

「北海道の心臓」となる契機は、北海道の内陸部で産出する石炭輸送ため北海道初の鉄道が建設されたことです。小樽から輸送された石炭は本州および海外で近代産業の勃興に貢献しました。明治中期以降、北海道への移民が本格化すると、増大する道内の人口を支える生活物資の供給基地として小樽は大きく発展していきます。

物流拠点となった小樽には卸商や金融機関が軒を並べ、海岸線には移出入の物資を保管する石造倉庫が並び、仕事を求める人々が殺到する「ゴールドラッシュ」さながらの活況が出現しました。この時期、全国で近代化の波は広がっていきますが、小樽はその急速な発展により特筆すべき都市に成長し、「神戸横浜に次ぐ商港」(三井銀行支店長会議録)、「時代のどんな波も素通りすることがない」(小林多喜二)などと、日本の近代化が凝縮したような都市となりました。

大正中期　物流倉庫が建ち並ぶ海岸線
＜小樽市総合博物館 蔵＞

経済の「血液」金融が生んだ北日本随一の都市

昭和初期　大手銀行・商社の支店が建ち並ぶビジネス街区＜小樽市総合博物館 蔵＞

鉄道と港が整備されたことで、明治末期頃までに小樽は豊かな北海道の資源の物流拠点となりました。当時、日露戦争の結果、南樺太が日本の領土となったことで、小樽はその貿易の窓口としてさらに発展していきました。この時期、多くの大手商社や銀行などの金融機関が小樽に進出して支店を設置し、最盛期には25の銀行の本店・支店が集中する金融のまちとなりました。

この頃建設された商社や銀行の建物の多くは、近代日本を代表する国内最高水準の建築家が、最新の技術と建材を駆使して建造されています。日本郵船小樽支店(明治39年築)の壮麗な社屋は、工部大学校(現・東京大学工学部)一期生の佐立七次郎が設計しました。日本銀行小樽支店(明治45年築)は、同じ一期生の辰野金吾たち、三井銀行小樽支店(昭和２年築)も同期生の曾禰達蔵と中條精一郎が手がけています。

色内大通り、日銀通り周辺には銀行建築が集中し、「色内銀行街」と呼ばれるようになりました。半径500m に明治・大正・昭和各時代の最高水準の建築が集積する日本でここだけのビジネス街区は、さながら「近代建築の博物館」です。建物の多くは現存し、文化施設や商業施設などに活用されています。

昭和初期　銀行街から小樽港を望む＜個人 蔵＞

「斜陽のまち」から観光都市へ・「民の力」による再生

昭和40年代 斜陽時代の運河＜小樽市総合博物館 蔵＞

倉庫が建ち並ぶ運河沿いの出店
昭和53年第1回ポートフェスティバル
＜志佐公道撮影＞

全国から新天地を求めて人々が押し寄せた小樽は、ニシン漁、北前船、商業、銀行など産業の活性化、財を成した商人による公共財の寄附、私費による施療院、孤児院、盲唖学校の運営、福祉、厚生、障がい児教育などは「民の力」が牽引（けんいん）し、これが小樽史の骨格を形づくってきました。この「民の力」は昭和後期にも継承されていきます。

小樽港は終戦後、物流の日本海側から太平洋側へのシフト、エネルギーの石炭から石油への転換、港湾荷役が倉庫からコンテナへ、このような社会変化により艀（はしけ）による物資運搬の役割を終えた運河は荒廃が進み、小樽は昭和40年代には「斜陽のまち」といわれました。

そんな中、小樽では車社会への対応や経済再生ために、昭和41(1966)年に倉庫を取り壊し、運河を埋め立てて道路にする都市計画が決定するのですが、「まちの記憶」を守ろうと運河保存運動が起こります。昭和48(1973)年に「小樽運河を守る会発起人会」設立に対し、昭和49(1974)年「道道臨港線早期完成促進期成会」が発足しますが、守る会は主婦・教員・文化人、期成会は小樽市・小樽市議会・小樽商工会議所・小樽港湾業界といった構成で、そこには大きな力関係がありました。ここに昭和53(1978)年、若者が運河保存運動の一環で「ポートフェスティバル」を開催します。こうして若者という新たな主役も加わり、運動はその後のわが国のまちづくりの先駆けとなりました。一方で運動が市民に広く受け入れられた背景には、歴史的にまちをつくってきた市井の人々の誇りと「民の力」の伝統があったのです。

歴史を活かすまち・小樽の新たな鼓動

小樽雪あかりの路　運河会場＜川嶋王志撮影＞

保存運動の結果、運河は全面保存こそできませんでしたが、一部は散策路として整備され、小樽は市民が再びまちに誇りを持てる観光都市として再生しました。運河保存運動が発信した「歴史に学び、歴史を活かす」動きは今も脈々と引継がれ、小樽観光の魅力につながっています。

堺町では古い建物再生による多様な観光施設、旧手宮線では廃線後のレールを残した散策路、銀行街では銀行建築再生による美術館・博物館やレストランなど、「民の力」の現代版といえます。

このような小樽独自の観光では、歴史物語の再生、ライフスタイルの再生、多様な交流の再生により、小樽独自の新たなストーリーが紡がれています。

そして今日、市民と行政、経済界が一体となる「小樽雪あかりの路」は「官民協働」のモデルとなり、多くの外国人ボランティアにも支えられるようになってきました。「民の力」は行政、経済界はもとより世界にも広がりを見せています。

小樽では、今を生きる人々が遺産に新たな命を吹込み、平成13(2001)年「旧手宮鉄道施設」、令和4(2022)年「旧三井銀行小樽支店」が重要文化財、平成18(2006)年「ＪＲ北海道小樽駅」、平成22(2010)年「旧青山別邸(主屋・文庫蔵・板塀)」が登録有形文化財、そして北海道や小樽市指定の文化財も年々整備されています。こうしてかつて物流基地であった小樽は、交流拠点へ変貌し、文化と経済の融合によって、まちの個性を活かし、未来に向けてもう一度「心臓」の鼓動を動かす物語が再生されています。

大正13年建築　令和３年保存決定
運河沿いの北海製罐第三倉庫＜川嶋王志撮影＞

「北海道の心臓」

構成文化財解説

構成文化財は、「北海道の心臓」を構成する26それぞれのストーリーをまとめています。

＜写真：川嶋王志撮影＞

① 天狗山からの眺望（小樽港）

天狗山山頂から小樽港を望む＜小樽市 蔵＞

小樽の市街地の背後に位置する天狗山(標高532.5m)からまちを一望すると、階段状にせり上がったすりばち状の独特の地形、そして小樽港と周辺に拡がる市街地全体を見渡すことができます。小樽港は、江戸時代半ばから明治時代にかけて北前船が数多く往来し、明治初期以降、空知地域の石炭が鉄道で小樽に運ばれるようになると、石炭運搬船で賑わいました。天狗山は、小樽の黎明期から現在まで小樽港の歴史を見守り続けてきました。小樽で青春時代を過ごした小林多喜二は、このまちを「街並が山腹に階段形に這い上がった港町で、広大な北海道の奥地から集まってきた物産が、そこから又内地(本州)へ出て行く謂わば北海道の『心臓』みたいな都会である」と表現しました。小樽市の地域型日本遺産(候補)ストーリーはこの一文に由来しています。

明治末から大正にかけて、小樽でスキーが普及すると天狗山にコースが整備され、「スキー王国」小樽を担う選手が数多く育っていきました。戦後、観光地として開発が進められ、昭和31(1956)年には天狗山観光道路、昭和55(1980)年にはロープウェイが開通しました。現在では徒歩や道路、ロープウェイで気軽に山頂へ行くことができ、スキー場では小樽港を見ながらスキーやスノーボードを楽しめます。夜景は北海道三大夜景に認定されています。

天狗山からの眺望は、港が舞台、山にせりあがる街並みを客席に見立てると、小樽を「劇場都市」にたとえることもでき、港周辺が仕事の場で、山側に生活の場ができてきたともいえます。また街区の形成も港から始まり、人口増にともない次第に山に向けて街並みが形成されてきたことから、小樽の歴史の積み重ねを感じることのできる最高の景観です。

海から天狗山を望む

参考文献
『小樽市歴史文化基本構想』(小樽市教育委員会、2020年)
「天狗山の開発」『小樽市史第八巻 行政編(中)』(小樽市、1995年)
小林多喜二「故郷の顔」『女人芸術』(1932年１月号)
『小樽歴史年表』(歴史文化研究所、2006年)

② 旧手宮鉄道施設　国指定重要文化財

国指定重要文化財　旧手宮鉄道施設＜川嶋王志撮影＞

平成13(2001)年に国の重要文化財に指定された旧手宮鉄道施設は、機関車庫三号・一号・転車台・貯水槽・危険品庫・手宮高架桟橋擁壁(ようへき)からなり、すべて今から100年以上前の明治10年代から大正時代にかけて造られたものです。

明治18(1885)年完成の機関車庫三号は、国内現存最古の機関車庫であり、北海道最初の蒸気機関車である「義経」「弁慶」などがこの機関車庫に入っていた時代もあり、ここから北海道の鉄道の歴史が始まりました。

蒸気機関車を方向転換するための転車台は、終点や途中の大きな駅には欠かせないものでした。機関車庫の背後にある貯水槽は、蒸気機関車の運転や車輌の清掃などに使う水を供給するものです。こうした大きな設備は当時の手宮の活気を表しています。

明治時代末期に造られた手宮高架桟橋は、石炭の積みおろしを機械化する画期的な施設でした。こうして石炭車から船への積みこみが効率化されることになり、石炭産業を支える手宮の役割はますます大きくなっていきました。

旧手宮鉄道施設はいわば列車の駐車、転車、補修、集荷を担う総合施設で、ここに小樽市総合博物館が設置され、現在はその構内に集約されています。そして博物館の構内を走るアイアンホース号(Porter4514)は、北海道で最も古い動態保存の蒸気機関車。製造は明治42(1909)年、北海道で最初の鉄道を走った「義経号」「弁慶号」「しづか号」と同じポーター社で製造された機関車で、蒸気機関車全盛期の小樽を現代に再現する「動く歴史絵巻」と言えます。

アイアンホース号＜川嶋王志撮影＞

参考文献
『重要文化財 旧手宮鉄道施設修理報告書』（小樽市、2010年）
『開拓使事業報告』第４編（大蔵省、1885年）
『北海道鉄道百年史』上巻（1976年）
『新日本鉄道史』上巻（川上幸義、1969年）
「小樽新聞」「北海タイムス」

③ 小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群

アイアンホース号 <川嶋王志撮影>

石炭の積み出しなどのため広かった手宮駅構内に、北海道で活躍した鉄道車輛の保存が始まったのは、昭和38(1963)年に北海道鉄道記念館がオープンしたときにさかのぼります。すでに手宮に配属された機関車もなくなり、石炭積み出しの主力が小樽築港駅に移り、広い構内も持てあまし気味になっていたころでした。記念館開設以来車両も増え、小樽市総合博物館に移管後は保存車両の数では日本有数の施設となっています。とくにラッセル車から除雪兼用ディーゼル機関車までの除雪車の歴史を実物車両で知ることができるのは、全国唯一です。

令和４(2022)年４月29日、蒸気機関車「アイアンホース号」の運行開始にともなって、明治期の客車や貨車をイメージして改修した「一等客車」「三等客車」と「石炭貨車」の３両が新たにお披露目され、鉄道体験施設としてますます充実されました。

「しづか」号 鉄道記念物

「しづか」号は明治18(1885)年アメリカのポーター社製。明治13(1880)年に開業した官営幌内鉄道初期の「義経」「弁慶」と同形。大雪で走れなくなった「義経」を助けにいった「弁慶」も立ち往生し、さらに「しづか」も加わりようやく脱出できたというエピソードも伝えられています。

しづか号 <川嶋王志撮影>

「大勝」号 鉄道記念物

大勝号 <小樽市総合博物館蔵>

明治28(1895)年北海道炭礦鉄道手宮工場で製造された蒸気機関車「大勝」号は、国産第２号の蒸気機関車で、現存最古の国産蒸気機関車です。その名は日清戦争の勝利を記念してつ

けられました。これが契機となり、今日の小樽の地場産業である機械工業や金属加工業に派生しています。

い１号　鉄道記念物

い１号〈川嶋王志撮影〉

い１号は明治25(1892)年北海道炭礦鉄道手宮工場で、アメリカから輸入された幌内鉄道の客車を手本に製造された一等客車です。当時の優れた木工技術を今に伝えています。

キハ03形 キハ03 1号　準鉄道記念物

キハ03形 キハ03 1号〈小樽市総合博物館 蔵〉

キハ03形は昭和31(1956)年から北海道向けに造られ、地方ローカル線の合理化の歴史を伝える国鉄のレールバス唯一の保存車です。

キ600形　キ601号　準鉄道記念物

キ600形 キ601号〈小樽市総合博物館 蔵〉

キ601号は大正12(1923)年ALCO(アルコ、アメリカン・ロコモチヴ・カンパニー)から輸入した日本初のロータリー除雪車です。雪を遠くまで飛ばせるため、ラッセル車では対応できないような大雪に活躍しました。

キ800形　キ800号　準鉄道記念物

キ800形は昭和３(1928)年鉄道省苗穂工場(今のJR苗穂工場)で蒸気機関車の炭水車(テンダー)を利用して製造された、日本初のマックレーかきよせ車です。鉄道が北海道の交通の主力であった時代、雪と闘い、列車の運行を支えてきた除雪車の歴史を見ることができます。

キ800形〈川嶋王志撮影〉

写　真　博物館所蔵写真フォルダー

参考文献
『北海道鉄道百年史』上中下巻(日本国有鉄道北海道総局、1976～1981年)
『機関車義経号』(日本国有鉄道鷹取工場、1968年)
『機関車の系譜図』1・3 (臼井茂信、1972・1976年)
『私の蒸気機関車史』上　(川上幸義、1978年)
『日本蒸気機関車史』私設鉄道編Ⅰ(金田茂裕、1981年)
『H.K.ポーターの機関車』(金田茂裕、1987年)
『国鉄レールバス　その生涯』(岡田誠一、2000年)
『日本の貨車』(貨車技術発達史編纂委員会、2000年)
「鉄道史料」19号(1980年７月)
「函館新聞」「小樽新聞」
「北海道毎日新聞」
「北海タイムス」「北海道新聞」

④ 旧手宮線散策路

色内駅（戦前）
＜小樽市総合博物館 蔵＞

手宮線沿線の色内駅（戦後）
（星コレクション）＜小樽市総合博物館 蔵＞

北海道最初の鉄道、官営幌内鉄道は明治13（1880）年11月に手宮～札幌間が仮開業、明治15（1882）年11月には札幌～幌内間が完成され、鉄道建設の目的であった幌内炭鉱からの石炭輸送が始まりました。明治42（1909）年10月には小樽（今の南小樽）～手宮間が手宮線と呼ばれるようになり、ここではじめて「手宮線」の名前がつけられます。

戦後になると、手宮線の旅客営業は昭和37（1962）年５月に廃止され、さらにエネルギーの石油への転換により炭鉱が次々に閉山し石炭輸送が激減、ほかの貨物も自動車輸送に代わっていきました。その結果、昭和60（1985）年11月手宮線は貨物営業も廃止され、その役割は終わります。

廃止後の手宮線は、北海道最初の鉄道であり北海道の開拓や発展に大きく貢献したという歴史的価値が認められ、線路などの鉄道施設を残した遊歩道とし整備されることになりました。平成28（2016）年には寿司屋通りから手宮（小樽市総合博物館手前）まですべての工事が終わり、旧手宮線散策路として生まれ変わっています。手宮線は市街地を横断していることから、小樽観光で最初に散策路が整備された運河や海岸線の拠点から、市街地への動線の役割を担い、観光客のインスタ映えスポットと同時に、日常の市民散策路の人気コースとなっています。

旧手宮線散策路＜川嶋王志撮影＞

旧手宮線散策路
＜真柄利香撮影＞

参考文献
『北海道鉄道百年史』上中下巻（日本国有鉄道北海道総局、1976～1981年）
『開拓使事業報告』第４編（大蔵省、1885年）
『新日本鉄道史』上巻（川上幸義、1969年）
『明治期鐵道史資料』第二篇（１）社史（４）所載
『北海道炭礦鉄道略記』『北海道鉄道略記』（野田正穂ほか、1980年）
『100年のあゆみ　駅史』（手宮駅、1980年）
『幌内線史』（岩見沢市・三笠市、1988年）
『停車場変遷大事典』（国鉄・ＪＲ編　石野哲、1998年）
「函館新聞」「北海道毎日新聞」
「小樽新聞」
「北海タイムス」「北海道新聞」ほか

⑤ 小樽港北防波堤

明治41年以前 防波堤工場
＜小樽市総合博物館 蔵＞

江戸時代から小樽港は、「天然の良港」といわれていましたが、波の高いときには荷物の積み卸しができないこともありました。小樽港は札幌に近く、開拓のための物資を本州から受け入れる港として重要だったので、これは大きな問題となっていました。

札幌農学校卒業後、ヨーロッパで土木工学を学んだ廣井勇（ひろいいさみ）は、明治22（1889）年帰国後、札幌農学校教授となり、北海道の港湾調査をしました。小樽では試験工事をした後、明治30（1897）年５月には廣井勇が所長となり、小樽港北防波堤の建設が開始されました。

当時、波を防ぐ防波堤建設はまだ確かな技術が確立されていませんでしたが、明治25（1892）年から政治家に廣井自ら働きかけ、明治29（1896）年の帝国議会で議決され、明治30（1897）年４月１日にその工事が着工します。廣井の指導の下、日本人技師だけで、明治41（1908）年に国内初の本格的外洋防波堤が竣工しました。

廣井は日本ではじめて海外の新技術を積極的に取り入れ、自らセメントをこねて作業し、海に潜り海底のようすを確かめるなど、率先して推進しました。防波堤の竣工式は華々しく行われましたが、廣井はそれまで防波堤建設に共に携わってきた人たちの苦労に報いるため、竣工式に出られない小樽築港事務所の職員や作業員に対し自費で酒食を振るまいました。このことは、廣井が実務を重んじる学者かつ技術者であり、仕事の内容にも、そして地位や身分にも分けへだてがなかったことを物語っています。

防波堤は明治41（1908）年に完成、引き続き南側の第二防波堤建設に取りかかりました。この南防波堤建設には、廣井の後継者で、第３代小樽築港事務所長の伊藤長市（のち伊藤長右衛門（いとうちょうえもん））が大きな力をつくしています。伊藤は、「小樽港生みの親」といわれる廣井に対し、「小樽港育ての親」として、小樽の人たちの心のなかに長く記憶されています。

北防灯台
＜小樽市総合博物館 蔵＞

軌道起重機＜小樽市総合博物館 蔵＞

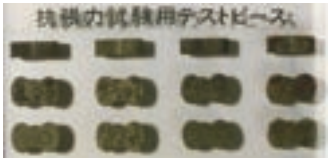
参考文献
『小樽築港工事報文』前編・後編（北海道、1908年・1924年）
『写真集 小樽築港100年のあゆみ』（小樽港湾建設事務所、1997年）
「小樽新聞」「北海道毎日新聞」「北海タイムス」

⑥ 小樽港湾事務所みなとの資料コーナー所蔵防波堤関係資料

小樽港湾事務所みなとの資料コーナー

長期試験成績表

展示の様子＜川嶋王志撮影＞



抗張力試験用テストピース

小樽築港工事報文前編所載セメント試験（抜粋）

小樽港防波堤（北防波堤）建設のため小樽築港事務所長を務めていた廣井勇は、なにより実務を重んじる技術者でした。

こうした廣井の姿勢を今に伝えるのが、コンクリートの強さに関する調査です。セメントへ火山灰を混ぜると強さがどのように変わるかは、まだ確かめられていませんでした。そこで廣井は、セメントの種類、混ぜる砂の種類、加える火山灰の量、空中・淡水・海水での差などで強度や耐久性について細かく調べて報告しています。

この調査は南防波堤建設にあたった第３代小樽築港事務所長の伊藤長右衛門に引き継がれ、今でも「百年耐久性試験」として続けられています。この試験は竣工時につくられたテストピースを材料に行われるため、現在（2021年）残数がおよそ3,000個、ただし中には劣化しヒビ割れを起こしているものは試験に耐えられないため、試験継続の可能期間も限られているようです。構造物を造り放しで終わることなく、こうして100年以上も責任を持とうとする廣井の人格がうかがえるエピソードです。こうした表面にはなかなか現れない地道な努力が、日本の発展を支えてきたのです。

明治41（1908）年竣工の北防波堤はすでに114年経過し、今日も小樽港を荒波から守ってくれています。この100年以上にもわたる北防波堤ストーリーには、試験し続けるという一貫した方針があるからこそ紡がれてきたといえます。

参考文献
『小樽築港工事報文』前編・後編（北海道、1908年・1924年）
『写真集　小樽築港100年のあゆみ』
（小樽港湾建設事務所、1997年）

⑦ 北浜地区倉庫群

明治44年以後の北浜地区倉庫群＜小樽市総合博物館 蔵＞

明治20年代、小樽港が商港として重要性が高まるにつれ、経済の発展、人口の急増のため新開地が必要になり、海岸の埋め立てが盛んに行われるようになりました。明治22(1889)年の埋め立てによって造成された北浜町と南浜町の埋め立て地の譲受人（ゆずりうけにん）には、北陸の北前船主や各地の廻船問屋たちが多数含まれており、明治20～30年代にかけて倉庫が数多く建てられていきました。これらの倉庫群は営業用倉庫として使用され、商業都市として発展し始めた小樽の近代化を支えていきました。小樽や札幌産の軟石を木材の骨組に固定した木骨石造（もっこつせきぞう）であることが特徴で、様々な物資の保管に適し、高い防火性、建造コストの安さ等により、大正中期頃にかけて多数建造され、現在まで小樽のまちなみを象徴する建造物となっています。

一部の倉庫は、博物館や販売店、イベントスペース、カフェ等に活用され、市民・観光客に親しまれています。これらの倉庫のうち５件(旧大家倉庫、旧小樽倉庫、旧増田倉庫、旧右近倉庫、旧広海倉庫)は小樽市の日本遺産「北前船寄港地・船主集落」の構成文化財に認定されており、旧澁澤倉庫を加えた６件を日本遺産候補地域ストーリーの構成文化財としています。

現在の北運河倉庫 ＜川嶋王志撮影＞

① 旧大家倉庫

小樽市指定歴史的建造物第1号
1985年7月指定

旧大家倉庫は、明治27(1894)年に石川県の瀬越(現・加賀市大聖寺瀬越町)出身の北前船主・大家七平によって建造されました。建物妻面の「ヤマシチ」は大家家の印です。越屋根、入口部分の二重アーチが特徴的な、小樽を代表する木骨石造倉庫の一つです。大家家は江戸時代から北前船経営に従事し、４代目七平の時代に小樽へ進出して倉庫や支店を設置しました。４代目七平は積極的に西洋型帆船や汽船を導入し、同家の全盛時代を築きました。明治35(1902)年には日本海一周定期航路を開設し、対岸の朝鮮・ロシアを直結する独創的な航路として日本海海運史上、重要な役割を果たしました。明治32(1899)年には住吉神社に同郷の北前船主で兄弟の広海二三郎と第一鳥居を寄進しています。

明治27年以後の大家倉庫
〈大家紹嘉氏提供〉

旧大家倉庫
〈川嶋王志撮影〉

② 旧小樽倉庫

小樽市指定歴史的建造物第13号
1985年7月指定

旧小樽倉庫は、明治23(1890)年から明治27(1894)年にかけて、石川県の橋立(現・加賀市橋立町)の北前船主・西出孫左衛門と西谷庄八によって、北海道最初の営業倉庫会社の倉庫・事務所として建造されました。屋根瓦にシャチホコ８体を載せた意匠が特徴的で、煉瓦造の事務所を中心に左右対称に中庭を囲むように木骨石造の倉庫が配置され、荷物を効率良く出し入れできるように設計されています。明治38(1905)年から山本久右衛門が小樽倉庫会社の経営者となり、昭和57(1982)年まで同社の社屋・倉庫として使用されました。昭和60(1985)年には北側に小樽市総合博物館運河館として再生され、北前船関連資料が多数展示されています。平成２(1990)年には南側に小樽運河プラザ、令和２(2020)年には事務所棟に小樽と北前船の歴史をコンセプトにした小樽百貨 UNGA↑が営業を開始しています。

明治26年11月12日 小樽倉庫開業式
〈西谷家提供〉

旧小樽倉庫
〈川嶋王志撮影〉

③ 旧澁澤倉庫

小樽市指定歴史的建造物第20号
1991年7月指定

旧澁澤倉庫は、明治25(1892)年頃、当時の小樽を代表する海産商の一人、遠藤又兵衛によって遠藤倉庫として建てられました。羽後国象潟(現・秋田県にかほ市)出身の遠藤又兵衛は、反物の行商、ニシンや棒鱈の販売で成功し、明治12(1879)年に小樽を拠点として活躍しました。大正４(1915)年、事業の失敗により遠藤倉庫は第一銀行の抵当物件となり、同年10月、日本有数の実業家・渋沢栄一によって澁澤倉庫となりました。当時、小樽の倉庫業では不正取引が多かったことから渋沢は不正防止を徹底し、小樽の倉庫業界の近代化を進めました。２つの倉庫の上に大きな切妻屋根を架けた本体の前に２棟の倉庫が突き出た特徴的な形状となっており、平成18(2006)年からカフェ Press Cafe、平成22(2010)年からライブハウス　ゴールドストーンが再生して営業しています。

明治42年の旧遠藤倉庫（旧澁澤倉庫）
＜小樽市総合博物館蔵＞

旧澁澤倉庫、左ゴールドストーン、右 PressCafe
＜川嶋王志撮影＞

④ 旧増田倉庫

小樽市指定歴史的建造物第22号
1991年7月指定

旧増田倉庫は、明治36(1903)年に石川県の橋立(現・加賀市橋立町)出身の北前船主・増田又右衛門によって建造されました。当時、倉庫のすぐ前は海で、手宮駅と港に近く、海陸の輸送と貯蔵には最適の場所でした。隣接する旧広海倉庫、旧右近倉庫と共に、かつての倉庫街の面影をいまに伝えています。増田家は、全国有数の大規模な北前船主を多数輩出した船主集落の橋立でも上位３家と言われる資産規模を誇り、橋立に現存する邸宅の巨大な石垣は同家の威勢を象徴しています。増田家は江戸時代から北前船経営に従事し、明治10年代には同家史上最多の８隻の船を所有しました。小樽に進出した明治30年代には西洋型帆船３隻を所有していましたが、汽船は導入しませんでした。

明治後期～大正期
多くの北前船（弁財船、合の子船）が沖止まり
＜小樽市総合博物館蔵＞

旧増田倉庫＜川嶋王志撮影＞

⑤ 旧右近倉庫

小樽市指定歴史的建造物第65号
1996年7月指定

旧右近倉庫は、明治27(1894)年に福井県の河野(現・南越前町河野)出身の北前船主・右近権左衛門によって建造されました。妻壁の「〃」は右近家の印である「一膳箸」を意味し、右近家の所有船の船旗にも掲げられていました。大正13(1924)年、手宮駅構内火薬爆発事故により越屋根がなくなり、現在の外観となりました。右近家は、江戸時代から北前船経営に従事し、幕末から明治期に活躍した９代目権左衛門の頃には全国有数の船主となりました。９代目権左衛門は明治12(1879)年に小樽へ進出し、有幌地区に土地を購入して倉庫と仮宅を建設。倉庫業と海陸物産業を開始しました。祝津地区では漁場経営も行っており、岩内では炭鉱経営も手がけていました。右近家は保険業に進出し、加賀の北前船主・広海家とともに日本海上保険株式会社(現・損保ジャパン)を創設しました。

明治42年頃　右近倉庫
『小樽区外七郡案内』
〈小樽市総合博物館蔵〉

旧右近倉庫　〈川嶋王志撮影〉

⑥ 旧広海倉庫

小樽市指定歴史的建造物第66号
1998年6月指定

旧広海倉庫は、明治22(1889)年、石川県の瀬越(現・加賀市大聖寺瀬越町)出身の北前船主・広海二三郎によって建造されました。小樽で最初期に建てられた大型の木骨石造倉庫の一つで、入口付近の二重アーチ、越屋根が特徴的です。広海家は最も長期間、海運業を営んでいた北前船主家の一つで、18世紀半ば以降、蝦夷地(北海道)へ進出、明治維新後は国内有数の海運業者となりました。広海家は明治７(1874)年頃、小樽へ進出しました。明治12(1879)年、４代目二三郎は他の船主に先駆けて西洋型帆船を導入し、明治21(1888)年には父の反対を押し切って汽船を購入しました。この倉庫を建設したのはその翌年です。同郷の北前船主で、兄弟の大家七平(４代目)と共に住吉神社の第一鳥居を寄進しています。

昭和40年代の旧広海倉庫
〈小樽市総合博物館蔵〉

旧広海倉庫　〈川嶋王志撮影〉

⑧ 南浜地区倉庫群

旧木村倉庫（現北一硝子三号館）
＜川嶋王志撮影＞

旧高橋倉庫（現小樽芸術村ステンドグラス美術館）
＜川嶋王志撮影＞

明治20年代から昭和初期にかけて建設された３件の倉庫群です。当時、物流の増加にともない小樽港の重要性が高まり、人口が急増していくと新開地が必要になり、海岸の埋め立てが盛んに行われ、大型の木骨石造の倉庫が次々と造られていきました。明治22(1889)年の埋め立てによって、北浜町と南浜町の埋め立て地が造成されます。北浜地区には明治20年代から30年代にかけて集中的に木骨石造倉庫が建設されていきましたが、南浜地区では、現存する旧木村倉庫、旧嶋谷倉庫、旧高橋倉庫のように、明治20年代から昭和初期の長期間にわたって倉庫の建造が続きました。これらの倉庫は、小樽を拠点に汽船海運業や倉庫業、雑穀の取引などで成功し、大きな財を成した実業家によって建造されていきました。旧木村倉庫は、明治から昭和初期に問屋街として繁栄し、その後衰退した堺町通りに位置し、昭和58(1983)年、北一硝子三号館として再利用されたことで、小樽が観光都市化していく起点となりました。旧嶋谷倉庫はアイスクリーム店(現在閉店)、旧高橋倉庫は美術館と、様々なかたちで活用され、小樽観光の中軸を担っています。これらの倉庫３棟は建設当初、物流基地としての小樽を支え、時代を経て現在では観光都市・小樽を支えています。

旧嶋谷倉庫（現北のアイスクリームやさん・休館中）
＜川嶋王志撮影＞

参考文献
『小樽市史第一巻』（小樽市、1958年）
『小樽市史第二巻』（1963年）
木村円吉『雪の駆逐艦』（1993年）
『着地型観光商品づくりのための素材集』
（NPO法人 OBM企画・発行、2021年）

① 旧木村倉庫

小樽市指定歴史的建造物第21号
1991年7月指定

トロッコレールが残る館内<川嶋王志撮影>

明治24(1891)年、木村倉庫として建てられました。中央の通路を挟んで２室に分かれ、通路には港から荷物を搬入するためのトロッコのレールが現存しています。木村円吉(初代)は、天保元(1830)年、青森県大泊で生まれ、弘化３(1846)年には北海道の増毛でニシン漁を営み、後に浜益にも進出しました。渡島福島の漁家・花田伝七の三男を２代目円吉の孫娘ミヤの婿養子に迎え、共に漁業を営みました。木村家は独自で建網の開発に成功し、明治中期には小樽を拠点とし、ニシンの運送を営んでいます。昭和40(1965)年、６代目円吉は小樽商工会議所会頭として、新日本海フェリーを小樽に誘致することに成功しました。昭和58(1983)年、木村倉庫は北一硝子に譲渡され、北一硝子三号館として再生しました。この倉庫は小樽の歴史的建造物再利用第1号として、観光都市・小樽の起点になりました。

② 旧嶋谷倉庫

小樽市指定歴史的建造物第42号
1993年11月指定

石蔵の面影を残す館内<川嶋王志撮影>

この倉庫の建築年は不詳ですが、昭和８(1933)年に嶋谷汽船ビル（現・協和浜ビル）が建てられたときには既に裏にあり、以後嶋谷汽船の倉庫として使用されてきました。嶋谷汽船株式会社のルーツは、明治10(1877)年、嶋谷徳右衛門が山口県由宇に嶋屋を創業したことに始まります。後に小樽で嶋谷汽船を担ったのは、徳右衛門の長女ハルの婿養子八十八の３男俊郎です。小樽に支店を開設したのは大正８(1919)年ですが、その後間もなく、北海道庁から離島の物流促進として利尻・礼文の命令航路を打診された際、小樽に本社があることが条件だったため、小樽に嶋谷商船株式会社を設立しました(後に嶋谷汽船と合併)。嶋谷汽船は嶋谷グループが直接所有する、この倉庫と嶋谷汽船ビル、富岡にある社長宅の３件はいずれも小樽市指定歴史的建造物に指定されています。

③ 旧高橋倉庫

小樽市指定歴史的建造物第51号
1994年5月指定

小樽芸術村ステンドグラス美術館の館内＜川嶋王志撮影＞

大正12(1923)年、高橋倉庫として建てられました。高橋直治(なおじ)の倉庫は有幌に集中していましたが、大正後期には色内にも小豆収納用の倉庫が造られました。高橋直治は、安政３(1856)年、新潟県刈羽(かりわ)郡に生まれ、青年時代には大酒飲みの暴れ者でしたが、結婚して明治８(1875)年に北海道に渡り、明治11(1878)年に小樽の有幌町で雑貨店を開業しました。後に米穀海産物の委託販売や味噌醤油醸造を始め、蒸気精米を導入した先駆者の一人です。第一次世界大戦中、小豆を買い占めて大きな利益を得ました。小樽の相場は「小豆将軍の髭(ひげ)の動き具合一つで変動した」と言われます。この建物は平成元(1989)年ガラス販売店グラスシップ、平成14(2002)年海鳴楼(かいめいろう)、平成24(2012)年石原プロダクションおもしろ撮影館を経て、平成28(2016)年に小樽芸術村ステンドグラス美術館となりました。

⑨ 旧岡崎倉庫（３棟）

小樽市指定歴史的建造物第64号
1996年３月指定

田中酒造亀甲蔵＜川嶋王志撮影＞

明治35(1902)年から明治38(1905)年にかけて、岡崎倉庫としてこの３棟の倉庫が建築されました。この建物をたてた岡崎謙(おかざきけん)は、新潟県佐渡市出身で、味噌醤油醸造を営む父とともに渡道し、米穀・雑貨、荒物商、倉庫業などで財を成し、小樽区会議員としても活躍しました。能が盛んな佐渡出身の岡崎謙は、自ら能をたしなみ、北海道での能の公演を取り仕切っており、大正15(1926)年、小樽の自邸内に能舞台を建造しました。

昭和28(1953)年に田中酒造三代目田中市太郎が取得して、酒造場となりました。建物取得後は、現在の臨港線部分にも倉庫がありましたが、道路拡幅によって切り取られ、現在はその３分の２程度になりましたが、有幌倉庫群の面影を伝える貴重な倉庫となっています。平成８(1996)年、田中酒蔵株式会社亀甲蔵(きっこうぐら)となり、酒造りは冬、観光客は夏に集中していましたが、両方の都合を解決するために、通年製造を実現させました。そのため石造倉庫以外の製造所を更地にして駐車場としました。石造倉庫を積極的に酒造場に再生した事例は、後にも先にもないほど貴重な再生です。平成８(1996)年、小樽市歴史的建造物に指定、平成９(1997)年には小樽市都市景観賞を受賞しています。

見学窓＜川嶋王志撮影＞

参考文献
『着地型観光商品づくりのための素材集』
（NPO法人OBM、企画・発行、2021年）

国指定重要文化財

⑩ 旧日本郵船株式会社小樽支店及び附属倉庫群

建設間もない日本郵船小樽支店＜小樽市総合博物館 蔵＞

国指定重要文化財に指定されている小樽を代表する歴史的建造物の一つです。日本郵船株式会社は、明治18(1885)年、小樽に拠点を開設し、明治39(1906)年にこの建物を新築しました。設計は、当時、日本の近代建築を担った工部大学校(現・東京大学工学部)一期生の佐立七次郎(さたちしちじろう)です。建設まもない同年11月、日露戦争後、日本へ割譲されることになった南樺太の境界地域の、測量作業方法等の実務を協議した樺太境界画定委員会議がこの建物の２階会議室で開催されました。表玄関を中心とした左右対称のデザインが特徴的で、２階は小樽産軟石、腰や軒部分は登別産中硬石を使用した純石造建築です。１階カウンターの柱には古代ギリシア・ローマ時代の柱頭飾り、２階壁には金唐革紙(きんからかわかみ)が貼られています。佐立の恩師コンドルの教えを誠実に表現したこの建物は、小樽の建築水準を飛躍的に高め、附属倉庫群とともに商業都市に変貌した明治後半の小樽を象徴する建物といえます。昭和30(1955)年に小樽市へ譲渡され、昭和31(1956)年には小樽市博物館となりました。昭和59年から62年に保存修理工事が行われましたが、この工事から30年以上が経過し、外観・内観ともに老朽化したため、令和２年7月から大規模な保存修理工事が行われており、令和６(2024)年の再開館を目指しています。

鉄柱と格天井の格式ある1階
＜川嶋王志撮影　平成27年撮影＞

参考文献
『重要文化財旧日本郵船株式会社小樽支店保存修理工事報告書』(小樽市　1987年)
北川佳枝『近代商業建築を観る 旧日本郵船株式会社小樽支店の再生』(入澤企画制作事務所、1992年)
『小樽の建築探訪』
(小樽再生フォーラム編、北海道新聞社、1995年)

⑪ 日本銀行旧小樽支店 小樽市指定有形文化財

颯爽と立つ近代建築の巨体、建設間もない日本銀行小樽支店
＜小樽市総合博物館 蔵＞

小樽の代表的な歴史的建造物の一つで、明治45(1912)年、工部大学校一期生であり、当時の日本建築界のリーダー、辰野金吾(たつのきんご)を顧問とし、日本銀行技師長の長野宇平治(ながのうへいじ)(帝国大学工科大学卒)、嘱託の岡田信一郎(おかだしんいちろう)が設計しました。日本銀行は明治26(1893)年に小樽派出所を設置し、小樽港の発展に伴い明治39(1906)年に支店に昇格。明治42(1909)年から新築工事に着手しました。北日本随一の金融都市となった小樽を象徴する建物といえます。この建物には、当時の最新の技術と建材が採用されており、屋根の骨組みには国産(八幡製鉄所製)と、輸入(イングランド製、スコットランド製)の鉄骨を使用。屋根葺(ふき)材の鉄板の下は防火のためコンクリートで覆われています。外壁には煉瓦を積み、その表面にはモルタルを塗っています。これらの手法は日本銀行本店本館の建築にも見られない最先端の構造と仕上がりとなっています。長野宇平治が設計を取りまとめ、斜め向かいの旧北海道銀行本店も同時に設計しています。平成14(2002)年に日本銀行の撤退が決定すると、行政・経済界・民間が署名運動をはじめるなど保存運動が起こり、日本銀行に要望を行いました。その結果、平成15(2003)年にこの建物を活用して金融資料館が開館しました。現在、金融資料館として公開中。市有形文化財に指定されています。

平成30年の日本銀行旧小樽支店金融資料館＜川嶋王志撮影＞

参考文献
駒木定正「日本銀行小樽支店(明治45年)の設計者について
――辰野金吾・長野宇平治・岡田信一郎・小林懋一」
『北海道職業能力開発大学校紀要』(第22号、2003年)
駒木定正「日本銀行小樽支店(明治45年)の主要構造と仕様」
『日本建築学会計画系論文集』(1995年)
『小樽の建築探訪』(小樽再生フォーラム編、北海道新聞社、1995年)

⑫ 旧三井銀行小樽支店 国指定重要文化財

建設間もない三井銀行小樽支店＜小樽市総合博物館 蔵＞

色内銀行街を代表する銀行建築の一つで、昭和２(1927)年、工部大学校一期生の曾禰達蔵と、中條精一郎(東京帝国大学卒)による曾禰中条建築事務所の設計、竹中工務店の施工により建てられました。外観はルネサンス様式ですが、骨組みには大正12(1923)年の関東大震災の経験をふまえ、当時の耐震技術の先端であった鉄骨鉄筋コンクリート造が採用されています。小樽で佐立七次郎が日本郵船小樽支店を石造で設計してから、わずか21年後に鉄骨鉄筋コンクリート造の建築ができており、日本近代建築の技術が短期間で飛躍的に進化したことを示しています。小樽は、工部大学校一期生のうち３人の作品が現存する唯一の地方都市であり、経済都市・小樽の繁栄を示しています。市内の都市銀行で唯一、21世紀まで営業を続けましたが、平成14(2002)年に閉店となりました。その後、石屋製菓が購入して音楽ホールなどへの活用が検討されていましたが実現しませんでした。平成28(2016)年に株式会社ニトリの所有となり、周辺の歴史的建造物を含め小樽芸術村を構成する一施設となりました。内部は公開され、イベントスペースとしても使用されています。令和4(2022)年２月、国重要文化財に指定されました。

小樽芸術村旧三井銀行小樽支店
＜川嶋王志撮影＞

参考文献
『旧三井銀行小樽支店建造物調査報告書』(2020年)、
駒木定正「旧三井銀行小樽支店の創建史料について」
『日本建築学会北海道支部研究報告集』(2005年)

⑬ 色内銀行街

大正後期～昭和初期　銀行街　三菱銀行小樽支店（左）と第一銀行小樽支店（右）＜小樽市総合博物館 蔵＞

明治から昭和初期に至るまで、小樽には合併や撤退を計算に入れなければ、のべ50以上の銀行が進出し、大正12（1923）年には最大25行が営業していました。これは小樽が商業をエンジンとして、北海道経済を牽引していた証です。

しかし、昭和40年代、小樽の経済衰退を受けて、次々に撤退し、色内銀行街と呼ばれた地区は、小樽の中心街に近かったこともあり、立派な建物は解体されずに地元企業の手に渡ります。

そんな昭和61（1986）年に地元の若者達が銀行街を通行止めにして「オタルサマーフェスティバル」を開催し、歴史的建造物の銀行や商社建築をライトアップし、JAZZの野外コンサートやビアホールで、街区のポテンシャリティを９年に亘って表現しました。ここから「銀行街はステキね」「こんなステキな場所だったとは」「もっと人々が集える場所に」「JAZZ が似合うね」などとその印象が市民に伝わり、次第に観光客にも小樽の歴史的魅力を提供するために、次々に美術館やレストランなどに再生されてきました。

銀行街の再生は創建当時の銀行や商社から見ると役割が大きく転換していますが、小樽運河が港湾としての役割から観光スポットとして変化したと同様に、「古いものを時代に対応して生かす」小樽らしい再生都市ストーリーの象徴です。

昭和中期戦後の銀行街＜小樽市広報広聴課 蔵＞

参考文献
『本邦銀行変遷史』
（社団法人東京銀行協会調査部・銀行図書館、1998年）
『北海道拓殖銀行史』（北海道拓殖銀行、1970年）
『北陸銀行50年史』（北陸銀行、1994年）
『第一銀行史』上巻（第一銀行八十年史編纂室、1957年）
『株式会社北海道銀行創立三十周年記念誌』
（北海道銀行、1924年）
『株式会社北海道銀行創立五十周年記念』（北海道銀行、1944年）
『富士銀行百年史』別巻（富士銀行、1982年）
『北海道拓殖銀行百年物語『営業店の沿革』』
（北海道拓殖銀行百年物語刊行委員会、2002年）
『続々三菱銀行史』
（東京三菱銀行企画部銀行史編纂チーム、1999年）
「北海道毎日新聞」「小樽新聞」
「北海タイムス」「北海道新聞」

① 旧小樽地方貯金局<現 市立小樽文学館・市立小樽美術館>

新しい為替貯金支局を北海道内のどこへ設置するか、小樽と札幌での官民あげての争奪戦の末、大正５(1916)年８月小樽に開局、これが小樽地方貯金局の前身、小樽為替貯金支局です。このことは北海道経済の中心地として小樽が重視されていたことを示しています。大正７(1918)年９月第一火防線(浅草通り)に小樽為替貯金支局の新しい庁舎ができましたが、昭和27(1952)年11月にそれまでの庁舎の斜向かいに建てられたのが、この旧小樽地方貯金局の建物です。

「貯金局」とは、旧郵政省の内局の一つで、全国各都府県に１か所、北海道に３か所(小樽・函館・旭川)の計49か所設置されていましたが、北海道には現在小樽の「株式会社ゆうちょ銀行(小樽貯金事務センター)」だけになっています。昭和50(1975)年10月には再び入船の新庁舎に移転したため、翌年６月小樽市役所分庁舎が開設されました。

分庁舎には昭和53(1978)年11月市立小樽文学館、翌年８月には市立小樽美術館が開館しています。

建設間もない小樽地方貯金局
<小樽市総合博物館 蔵>

市立小樽文学館
市立小樽美術館
<川嶋王志撮影>

② 旧百十三銀行小樽支店<現 小樽浪漫館>

小樽市指定歴史的建造物第５号
1985年７月指定

この建物は百十三銀行小樽支店として明治41(1908)年12月に建てられ、昭和３(1928)年３月北海道銀行(初代)との合併により堺町支店となりましたが、昭和５(1930)年９月廃止、昭和22(1947)年２月から昭和36(1961)年９月までは住友銀行小樽支店となりました。撤退後は銀行ではなく、看板製作の「Ｆフジモリ」、菓子店「小樽千秋庵」、そして平成15(2003)年には「小樽浪漫館」として再生しています。

第百十三国立銀行が明治11(1878)年に函館に北海道初の地場銀行として設立され、明治30(1897)年に普通銀行となって百十三銀行に改称されました。小樽にはすぐ近くに第百十三国立銀行が現存しています。同じ資本の銀行変遷がうかがえるほど、小樽の銀行街は豊かな環境といえます。

建設間もない百十三銀行小樽支店
<小樽市総合博物館 蔵>

小樽浪漫館
<川嶋王志撮影>

③ 旧北海道銀行本店<現 小樽バイン>

小樽市指定歴史的建造物第6号
1985年7月指定

北海道銀行(初代)は明治28(1895)年に小樽に支店を設置した余市銀行までさかのぼります。余市銀行は後に小樽支店を本店として小樽銀行となり、明治39(1906)年北海道銀行と改称し、百十三銀行など北海道内の中小銀行を合併していき、北海道で有数の銀行に成長しました。銀行街としての栄枯盛衰の中で、地元資本の銀行がたくましく生き延びてきたことがうかがえます。

この建物は明治45(1912)年に北海道銀行本店として建てられ、まわりには木造建築が多かったことから一段と目立ちました。

北海道銀行は昭和19(1944)年北海道拓殖銀行に合併されたので、翌年５月には銀行としては使われなくなり、戦後は小樽海運局、昭和40(1965)年には北海道中央バス本社となり、平成８(1996)年12月北海道中央バスの経営するワインカフェ「小樽バイン」が開業しています。

建設間もない北海道銀行本店
〈小樽市総合博物館蔵〉

小樽バイン
〈川嶋王志撮影〉

④ 旧第百十三国立銀行小樽支店<現 海鳴楼>

小樽市指定歴史的建造物第9号
1985年7月指定

函館に本店のあった第百十三国立銀行は明治26(1893)年５月堺町に小樽支店を設置しましたが、明治28(1895)年７月の火災で類焼したため12月新築移転、これが現存する建物です。燃えにくい石造建築としたのは、火災の教訓を活かしたものでしょう。銀行としては小振りですが、現存する「旧国立銀行」としては全国でも最古の一つともいわれ、小樽の銀行街の豊かさを物語っています。

第百十三国立銀行は明治30(1897)年株式会社となり百十三銀行と改称、さらに明治41(1908)年12月於古発(おこばち)川沿いに新築移転しました(❷の建物)。その後、旧支店は林屋製茶として長く使われ、平成13(2001)年閉鎖を経て平成16(2004)年菓子店「花月堂」、平成21(2009)年「オルゴール堂海鳴楼」となっています。

昭和中期の旧第百十三国立銀行小樽支店
〈小樽市総合博物館蔵〉

海鳴楼
〈川嶋王志撮影〉

⑤ 旧三菱銀行小樽支店<現 小樽運河ターミナル>

小樽市指定歴史的建造物第18号
1990年7月指定

三菱銀行小樽支店は大正11(1922)年10月開業、この建物は三菱ビルともいわれ、１階は銀行、２階は鉱業、３階は商事の各支店が入っていました。また、昭和12(1937)年12月には別館も完成、本館も改装され、北海道における三菱の本拠地にふさわしい姿となりました。小樽の銀行街にはこのように日本の財閥系の銀行も、競って支店を設けるほど活気があったことを物語ります。

三菱銀行小樽支店は昭和44(1969)年７月廃止され、三菱系オフィスビルとしての役割も終えました。その後は被服会社などを経て、平成18(2006)年７月北海道中央バス小樽運河ターミナルとなっています。

昭和12年以後
三菱銀行小樽支店
〈小樽市総合博物館 蔵〉

小樽運河ターミナル
〈川嶋王志撮影〉

⑥ 旧安田銀行小樽支店

小樽市指定歴史的建造物第19号
1990年12月指定

この建物は昭和５(1930)年12月安田銀行小樽支店として新築されたものです。安田銀行は昭和23(1948)年10月富士銀行と改称、富士銀行小樽支店は昭和45(1970)年11月廃止され、長らく日刊北海経済新聞社が使用し、平成18(2006)年６月廃刊により閉鎖、その後、飲食店「花ごころ」となっていましたが、令和４(2022)年３月現在では空き店舗となっています。

平成13(2001)年に中央通りの拡幅工事に伴い大規模な曳家(ひきや)工事が行われ、重量約２千ｔの鉄筋コンクリート造の建物を、斜め方向に約11m 移動させました。解体されることなく曳家までして保存が図られるのは、銀行街という群やこの建物への愛着が、小樽に浸透していたことの現れといえます。

昭和後期の
日刊北海経済新聞社
(旧安田銀行小樽支店)
〈小樽市総合博物館 蔵〉

(旧安田銀行小樽支店)
〈川嶋王志撮影〉

⑦ 旧第一銀行小樽支店<現 ミユキソーイング株式会社 小樽工場>

小樽市指定歴史的建造物第24号
1991年7月指定

第一銀行は大正元(1912)年９月二十銀行を合併したことにより、その小樽支店を引きつぎ、大正13(1924)年７月色内町に新築移転、これが現存する旧第一銀行小樽支店です。

昭和18(1943)年４月第一銀行は三井銀行と合併して帝国銀行となり、第一銀行小樽支店は帝国銀行色内支店となりましたが、すぐに廃止されています。昭和23(1948)年９月第一銀行は帝国銀行から独立し、再び第一銀行小樽支店となりますが昭和43(1968)年６月に撤退、建物と敷地は小樽市に寄附され、現在はミユキソーイング株式会社 小樽工場が使用しています。

第一銀行は渋沢栄一ゆかりの銀行ですが、大正４(1915)年に銀行より先に渋沢倉庫出張所を開設しています。小樽では三菱が銀行と商事、三井が銀行と物産、そして渋沢が銀行と倉庫の組み合わせで、大手資本の進出がラインナップしているのも大きな特徴です。

建設間もない第一銀行小樽支店
＜小樽市総合博物館 蔵＞

ミユキソーイング株式会社小樽工場
＜川嶋王志撮影＞

⑧ 旧第四十七銀行小樽支店<現 株式会社渋谷建設>

小樽市指定歴史的建造物第25号
1991年7月指定

富山に本店のあった第四十七銀行の小樽支店は昭和11(1936)年10月に新築されました。その後、同郷富山の十二銀行色内町出張所となり、昭和18(1943)年には旧富山系4行が合併し北陸銀行が設立されると、旧十二銀行色内町出張所は同年11月廃止され、その後は長く北海道紙商事を経て、現在は㈱渋谷建設が事務所として使用しています。

この建物も旧安田銀行小樽支店(33P)と同時期に、曳家工事が行われ北側(正面を見て右側)へ約1.1m、西側(山側)へ約1.6m移動しています。北陸銀行小樽支店は、小樽の銀行では現存最古です。また現使用者の渋谷建設が、社屋の正面に「株式会社第四十七銀行小樽支店」という立派な看板を特注して再生させています。

建設間もない第四十七銀行小樽支店
＜小樽市総合博物館 蔵＞

株式会社 渋谷建設
＜川嶋王志撮影＞

⑨ 旧三井物産小樽支店<現 松田ビル>

小樽市指定歴史的建造物第30号
1991年7月指定

三井物産は明治16(1883)年小樽に支店を設け、火災などのため移転を繰り返しましたが、昭和12(1937)年６月、この三井物産小樽支店(三井物産ビル)が建てられました。ここには三菱銀行小樽支店(三菱ビル)と同様、三井系会社の本店や支店が入居していました。

三井物産ビルは昭和54(1979)年売却され、松田ビルとなっています。「銀行街」の一角にこのような商事会社の大きなビルがあるのは、当時の小樽の商業都市としての地位を物語っているといえます。

昭和中期の三井物産小樽支店
〈小樽市総合博物館蔵〉

松田ビル
〈川嶋王志撮影〉

⑩ 旧北海道拓殖銀行小樽支店<現 小樽芸術村似鳥美術館>

小樽市指定歴史的建造物第31号
1991年10月指定

北海道拓殖銀行は、大正12(1923)年10月新たに２代目となる小樽支店を建てました。すでに色内通りの向かい側には小樽郵便局、浅草通りの向かい側には三菱銀行小樽支店(❺の建物)があり、拓銀新築移転の翌年には斜向かいに第一銀行小樽支店(❼の建物)が新築移転し、まさに「銀行街」の中心にふさわしくなりました。

昭和44(1969)年には小樽第二支店を小樽支店としたため、旧小樽支店の建物は縫製会社やホテル、美術館などになっていましたが、平成29(2017)年には小樽芸術村似鳥美術館となっています。

北海道拓殖銀行小樽支店は小説家小林多喜二が勤めていたことでも有名です。多喜二は手宮線の色内駅から第一火防線(浅草通り)を港へ向かって降りていき、拓銀へ通っていたといわれています。多喜二が作品のなかで描いた貧しい人たちとはまさに対照的な、雲の上の存在である資本家を象徴するかのような「銀行街」の光景を、多喜二は毎日どのような想いで眺めていたのでしょうか。

建設間もない北海道拓殖銀行小樽支店
〈小樽市総合博物館蔵〉

似鳥美術館
〈川嶋王志撮影〉

⑭ 色内通り、堺町通りの商店

～ストーリー・オブ・ストリート～

明治14年以後の堺町
〈小樽市総合博物館 蔵〉

昭和初期の色内通りの交差点
〈小樽市総合博物館 蔵〉

幕末小樽に集落が形成されたのは勝納川流域でしたが、明治14(1881)年の大火によって、堺町や信香町などに移転や新規出店が開始されていきます。現在この通りに平行する臨港線は当時海でしたので、船を基軸とした問屋業(小売業も兼業)には都合の良い通りだったのでしょう。そして問屋業は北海道開拓を背景に隆盛を極めたことから、立派な社屋が建設されてきました。

しかし昭和40年代から斜陽となり、この通りは寂れて空き店舗も放置される状況になってしまいます。ところが、昭和後期に起きた小樽運河保存運動を背景に、昭和58(1983)年に北一硝子三号館が開店したことが契機となり、堺町通りの古い社屋や店舗を再利用した観光施設が次々に開店し、観光客でに賑わう通りに様変わりしました。この変貌は、道内有数の観光スポットとなった小樽運河に最寄りの歴史的建造物が集積された通りだったことが大きな要因です。

こうして堺町通りが問屋街から観光街に再生され、その勢いは同じく歴史的建造物が集積する色内通りにも波及してきました。小樽運河保存運動を背景にした観光化において、点が線に、線が面になっていく40年近い歩みは、堺町から南運河、銀行街、色内へと、ストリートごと観光ストリートに変貌を遂げてきました。

参考文献
『小樽港史』（高畑宣一、1899年）
『小樽便覧』（垣田一郎、1906年）
『小樽区実業家百撰』立志篇（田尻稲堂、1906年）
『小樽区外七郡案内』（山崎鉱蔵、1909年）
『小樽』（棟方虎夫、1914年）
『小樽の人と名勝』（坂牛祐直、1931年）
『小樽商工名録』 各年版
『後志飲食物語』
（後志・小樽酒類製造業者活性化協議会、2001年）
『磯野小作争議・小樽港湾争議資料集』
（琴坂守尚、1990年）
「北海道毎日新聞」「小樽新聞」
「北海タイムス」「北海道新聞」ほか

① 旧名取高三郎商店<現 株式会社ナトリ(2階)・小樽大正硝子(1階)>

小樽市指定歴史的建造物第7号
1985年7月指定

銅や鉄などの建築資材を扱う名取商店は、明治37(1904)年５月の大火では危ういところで焼けるのをまぬがれましたが、明治39(1906)年妙見河畔に新築移転しました。大火の教訓から、道路に面した店部分には卯建を設け、連なる倉庫も石造りの蔵になっています。この建物は、平成10(1998)年から１階部分が大正硝子館本店となっています。

名取高三郎は小樽にはじめて電話が引かれた明治33(1900)年、近所だった小樽郵便電信局にその申し込みのため徹夜で並び、電話番号１番を得ています。後に小樽に進出した第一銀行から電話番号を譲ってほしいと言われたという話が残っています。

建設間もない名取高三郎商店
<小樽市総合博物館蔵>

小樽大正硝子
<川嶋王志撮影>

② 旧岩永時計店<現 小樽オルゴール堂堺町店>

小樽市指定歴史的建造物第８号
1985年7月指定

南小樽で質店をしていた岩永は、明治29(1896)年12月堺町に新しく店を建て時計店を開業しました。岩永は、南小樽方面よりも、これからは色内や堺町が発展していくと見こんだにちがいありません。時計店開業から５年後、明治34(1901)年11月同じ堺町通りの少し北になる色内町１番地に新築移転しました。これが今ある建物で、平成24(2012)年から小樽オルゴール堂堺町店となっています。

当時の新聞広告を見ると、「岩永時計舗」「岩永時計店」の両方があり、どちらでもかまわなかったようです。「明治33年岩永時計店楽隊結成<銀行大商辞書>」はいかにも進取の気性の表れです。「当日の音楽隊は又々岩永時計店並びに日の丸音楽隊より寄贈に決し<小樽新聞明治36年8月26日>」とあるように、岩永楽隊は開け行く小樽で人気を博していたことがうかがえます。

建設間もない岩永時計店
<小樽市総合博物館蔵>

小樽オルゴール堂堺町店
<川嶋王志撮影>

③ 旧早川支店＜現 vivre sa vie ＋ mi-yyu ＞

小樽市指定歴史的建造物第15号
1986年４月指定

文房具などを扱う早川支店は明治37(1904)年５月の大火で焼けてしまったため、すぐに建て直され同年11月に完成しました。早川支店はその後、丸越川又商店となります。店主は川又健一郎で、ＳＦ作家として有名な川又千秋はこの川又家の出身です。戦後まで営業を続けていましたが、平成19(2007)年から生活雑貨の店舗「vivre sa vie ＋ mi-yyu」として使われています。

この建物には卯建(うだつ)が掲げられています。防火のための智恵ですが、鶴・亀・朝日など縁起の良い意匠が彫刻されているのは、同年に旧店舗が火災で全焼したことから、立派な卯建にした動機が伝わってきます。

明治後期 早川支店(紙店)
＜小樽市総合博物館 蔵＞

vivre sa vie＋mi-yyu
＜川嶋王志撮影＞

④ 旧共成㈱ ＜現 小樽オルゴール堂 本館＞

小樽市指定歴史的建造物第17号
1989年３月指定

共成株式会社は、明治24(1891)年５月に開業しました。このころの精米は動力に水車を用いていたので、精米業者は於古発(おこばち)川・勝納(かつない)川・入船川の川岸にありました。

共成の本社は大正４(1915)年２月新築移転、これが現存する旧共成本社の建物です。共成はその後米問屋として発展を続け、北海道一といわれるまでになりました。富山出身の初代社長沼田喜三郎(ぬまたきさぶろう)は、明治27(1894)年に郷土の富山の人たちを今の沼田町(空知地区北西)に入植させたことから、大正11(1922)年町名として採用され、沼田町には共成という地名も残っています。

共成は、戦時中の食糧管理法により米が政府の手で配給されることになったため、会社の主力業務が立ちゆかなくなってしまいました。戦後は副業であった製薬業の会社として存続していましたが、現在は他社に合併され、伝統ある共成の名前は消えてしまいました。

共成＜市立小樽図書館 蔵＞

小樽オルゴール堂 本館＜川嶋王志撮影＞

⑤ 旧上勢友吉商店（うえせともきち）<現 手作り体験 遊工房>

小樽市指定歴史的建造物第23号
1991年7月指定

雑貨卸商（荒物問屋）の上勢商店は明治40（1907）年１月に創業しました。この建物ができたといわれる大正10（1921）年前後の新聞広告には「上勢豊治商店」となっており、上勢豊治は上勢商店の中心人物で、ほかの会社の役員などもしていました。豊治と友吉の関係は、豊治は大正時代から各種会社の役員をし、友吉が登場するのは昭和になってからで、昭和５年の㈱上勢商店設立時には豊治が代表取締役、友吉は平取締役、ここから類推すると親族と思われます。

昭和初期　上勢友吉商店
＜小樽市総合博物館蔵＞

上勢商店は戦後も営業していましたが、㈱ホクリョウとなり、平成19（2007）年撤退後、平成20（2008）年遊工房となっています。

荒物とは家庭で使う雑貨類で、ほうき、ざるなど、主に台所などで使うものをいいますが、明治２（1869）年から昭和元（1926）年まで北海道への移民は227万人を数え、その多くは小樽港に上陸して全道に移植していきましたので、生活に必要な荒物を商う商店が、小樽に密集し、最も盛んな業界の一つにもなっていました。

手作り体験 遊工房
＜川嶋王志撮影＞

⑥ 旧久保商店 <くぼ家>

小樽市指定歴史的建造物第33号
1993年11月指定

明治40（1907）年にこの建物を建てた久保商店の久保与三五郎は、小間物雑貨玩具などの卸商でした。大正11（1922）年久保商店は堺町通りの向かい側に新店舗を建築して、一時期は「久保デパート」となっていましたが、３年ほどで元の久保商店に戻っています。小売店よりも卸問屋が多かった堺町では、いくら小型とはいえ、百貨店経営は難しかったのかもしれません。

久保商店の建物は、大正13（1924）年損害保険業「犬島商会」を経て、昭和60（1985）年から喫茶店「さかい家」として営業を続けていましたが、平成29（2017）年大正硝子「くぼ家」として復活しています。堺町が問屋街から観光街への転機となった昭和58（1983）年「北一硝子三号館」に次ぎ、昭和60（1985）年開館で観光街へ促進を果たすと同時に、古い商家を品格ある喫茶店に改築した好例として、市民・観光客に愛されてきました。

昭和中期　旧久保商店
＜小樽市総合博物館蔵＞

くぼ家　＜川嶋王志撮影＞

⑦ 旧金子元三郎商店<現 おたる硝璃工房運河館>

小樽市指定歴史的建造物第34号
1993年11月指定

海産物委託販売商の金子元三郎商店は明治20年代に創業し、金子元三郎は、初代小樽区長、国会議員などをつとめた、小樽の代表的な商人であり、政治家の一人です。堺町の金子元三郎商店は明治28(1895)年７月の火災で焼けているので、今に残るこの建物はその後に再建されたものです。

選挙のたびに二大政党が議席を争った戦前期、小樽は「政争のまち」といわれるほどでした。金子も一方の旗頭として大活躍していますが、小樽の人たちからは、「金子さんは貴族的だ」(お高くとまっている)といわれる存在でした。

この建物にも両側に卯建が掲げられています。小樽の石造建築には倉庫、蔵、店舗などがありますが、卯建が現存するのは5軒(旧岩永時計店、旧早川支店、旧名取高三郎商店、旧北海雑穀)で、いずれも路面に構えた店舗です。

昭和中期 旧金子元三郎商店 <小樽市総合博物館蔵>

おたる硝璃工房運河館 <川嶋王志撮影>

⑧ 田中酒造店

小樽市指定歴史的建造物第36号
1993年11月指定

田中酒造店を始めた田中市太郎は、最初は清酒ではなく焼酎や白酒をつくっていました。戦時中の昭和19(1944)年10月後志地方のすべての酒造業者は強制的に合併させられ、田中酒造店も小樽合同酒造に加わりました。昭和31(1956)年５月小樽合同酒造から独立して田中酒造㈱を設立し、今に至っています。

北海道全域に名を知られた「北の誉」(野口酒造)をはじめとして、小樽には明治時代から30以上の酒造場が名をとどめていますが、今ではこの田中酒造だけとなりました。

田中酒造が長続きしているのは、早くから観光地としての小樽に注目して販売戦略を観光客へも広げたこと、酒造に適した道産米を古くから積極的に使用しノウハウを蓄積してきたこと、他社ブランドの醸造も引き受けるＯＥＭを展開したことが指摘されています。

昭和50年 田中酒造 <小樽市総合博物館蔵>

田中酒造 <川嶋王志撮影>

⑨ 旧荒田商会 <現 小樽芸術村ステンドグラス美術館 ミュージアムショップ>

小樽市指定歴史的建造物第52号
1994年5月指定

大正６(1917)年８月荒田汽船㈱を設立した荒田太吉は、昭和４(1929)年９月色内町に運送業などの合資会社荒田商会を設立、昭和９(1934)年12月には株式会社としました。このころの小樽には、荒田商会のほかにも、港の近くや運河沿いに多くの海運業者や運送業者がありました。これは北海道経済の中心地として、小樽では流通産業がいかに盛んだったかを物語っています。

荒田商会㈱は戦後も稲穂町で海運業・石油販売業などを営んでいましたが、旧荒田商会建物は、昭和40(1965)年「太平産業」、平成元(1989)年硝子販売「グラスシップ」、その後石原プロモーションの「おもしろ撮影館」、平成14(2002)年「海鳴楼」本店を経て、平成28(2016)年から小樽芸術村ステンドグラス美術館ミュージアムショップとなっています。

ステンドグラス美術館
ミュージアムショップ
<川嶋王志撮影>

⑩ 旧塚本商店<現 café色内食堂、北勝庵、游菓>

小樽市指定歴史的建造物第68号
2001年3月指定

絹布・綿布・毛織物卸商の㈱塚本商店は東京に本店があり、大正９(1920)年１月に色内に小樽支店を設置し、小樽進出と同時に店舗を新築したことになります。

戦後は塚本商事小樽支店として昭和44(1969)年12月札幌へ移転するまで使われ、昭和46(1971)年後藤商店を経て、平成27(2015)年 café色内食堂、平成30(2018)年蕎麦店の北勝庵、和菓子の游菓として再生されています。小樽で数少ない黒壁ですが、黒壁で有名な滋賀県長浜の黒壁建築群は、内部は木造で外部は土蔵に黒漆喰塗りであるのに対し、当建築は、内部は木造で外部はモルタル仕上げに黒く塗ったものです。まさに北海道の気候を考慮した荘厳な趣を醸し出しています。

昭和50年代の後藤商店
(旧塚本商店)
<小樽市総合博物館蔵>

café色内食堂、北勝庵、游菓
<川嶋王志撮影>

⑪ 旧小堀商店

小樽市指定歴史的建造物第72号
2011年5月指定

小堀商店は服・太物・綿フランネルなどを扱う卸問屋で、明治31(1898)年創業といわれます。南小樽駅に近いこのあたりは、織物や衣料品を扱う問屋が集まった地域でした。

この建物は、以後旭商事となり、平成元(1989)年伊藤染舗の工場となり、その後は小樽職人義塾大学校などに使われました。この学校では、ガラス工芸や染色など、小樽に今も残る各種職人の技術を伝承していく試みでした。令和４(2022)年３月現在では小樽の建築会社が所有し、新たな再生の準備をしています。

この建物は坂道に建てられていますが、小樽では歴史的に、石垣で平坦を造成してから建てるケースが多いのですが、同じ坂の街函館は、石垣が少なく対象的です。これは基礎で調整したもので函館によく見られるケースです。

昭和中期
小堀商店後に使用していた
株式会社旭商事
〈小樽市総合博物館蔵〉

旧小堀商店
〈川嶋王志撮影〉

⑫ 旧前堀商店

小樽市指定歴史的建造物第80号
2014年7月指定

銅鉄問屋の前堀銅鉄商店は明治21(1888)年10月創業、明治37(1904)年10月前堀銅鉄合資会社となりました。会社名の「前堀」は、代表者の前田と堀岡からとられたものでしょう。その後、有限会社前堀商店となり、現在では色内３丁目で株式会社前堀として営業中です。

昭和初期建築といわれるこの建物は、昭和55(1980)年３月北方舞踏派の稽古場「魚藍館」、劇場「万象館」、カフェ「ＢＢＣ」、骨董店「Ｉ」などを経て、現在１階は空き店舗になっています。

昭和50年代の魚藍館
〈小樽市総合博物館蔵〉

旧前堀商店
〈川嶋王志撮影〉

⑬ 旧磯野支店倉庫 ＜現 ISO＞

小樽市指定歴史的建造物第83号
2016年７月指定

米・雑穀・ニシンなどを扱う海陸物産商だった磯野小樽支店は明治30(1897)年７月に創業したといわれ、主人の磯野進(いそのすすむ)は小樽商業会議所会頭(1913)などもつとめましたが、なんといっても大正15(1926)年から翌年にかけての磯野小作争議をモデルとした、小林多喜二著『不在地主』で知られています。

富良野の磯野農場の争議では、小作人たちの運動、労働組合などの応援、世論の後押しもあり、磯野が要求を受け入れて決着しました。まさに大正デモクラシーの時代に、農業・文学・政治などが混合した中で結論が出された人道的決着でした。

昭和51年「海猫屋」＜小樽市総合博物館蔵＞

磯野支店は明治40(1907)年５月の大火で焼けましたが、明治39(1906)年建築といわれるこの建物はレンガ造だったので焼けなかったのでしょう。旧磯野商店倉庫には昭和51(1976)年喫茶店「海猫屋」が開業、昭和61(1986)年発行の村松友視『海猫屋の客』で一躍有名となりました。平成30(2018)年からレストラン「ISO」となっています。

ISO＜川嶋王志撮影＞

⑭ 旧北海雑穀株式会社＜現 小樽硝子の灯・彩や＞

小樽市指定歴史的建造物第85号
2017年４月指定

北海雑穀株式会社は、堺町に新しく社屋を建て明治40(1907)年７月に開業しました。会社名のとおり、ヒエ・アワなどの雑穀の委託販売や売買をしていました。北海雑穀の役員には、専務の中谷彦太郎(なかたにひこたろう)をはじめ、磯野商店の磯野進(いそのすすむ)や遠藤倉庫の遠藤又兵衛(えんどうまたべい)、青木乙松(あおきおとまつ)などの小樽の著名な実業家のほか江別や深川の人も名を連ねています。そのわりには会社経営は不安定だったのか、その後、移転を繰り返したうえ、昭和６(1931)年12月には解散してしまいました。大正年代に雑穀で大成功した「豆成金」こと高橋直治(たかはしなおじ)とは対象的で、同じような商品を扱ったビジネスでも格差があったことを物語っています。この建物は令和４(2022)年現在「小樽硝子の灯・彩や」となっています。

昭和初期　北海雑穀株式会社＜小樽市総合博物館蔵＞

小樽硝子の灯・彩や＜川嶋王志撮影＞

⑮ 旧小樽商工会議所

小樽市指定歴史的建造物第10号
1985年7月指定

昭和50年　小樽商工会議所＜小樽市総合博物館 蔵＞

商工会議所とは、地域の商工業の改善や発展を目的とした、商工業者の集まりです。小樽商工会議所の前身となる小樽商業会議所は、明治28(1895)年12月に設立が認可され、翌年８月初代会頭に山田吉兵衛（やまだきちべい）、副会頭に渡辺兵四郎（わたなべひょうしろう）が選ばれ、活動を始めました。これは札幌より10年以上も早く、函館に続いて北海道では２番目となるものでした。

二人ともものちに小樽区長にもなった小樽を代表する実業家です。渡辺は第３代会頭にもなり、この後の会頭にも銀行頭取、会社経営者、区会・市会議員、北海道会議員、衆議院議員など、小樽の政財界の主要なメンバーが就任しました。こうした人たちが会頭となっていたことで、小樽商業会議所は大きな影響力があり、衆議院議員選挙や道会・市会議員選挙と並び激しい選挙戦が繰り返されました。「北海道の心臓」は「民の力」にも焦点が当てられていますが、小樽商工会議所はまさに「民の力」の中心といえます。

小樽商業会議所は、昭和３(1928)年１月小樽商工会議所と改称した後、昭和８(1933)年10月新築移転したのがこの建物です。小樽商工会議所は平成21(2009)年６月小樽経済センタービルへ移転、旧小樽商工会議所は令和４(2022)年１月、ホテル「OMO5小樽」としてオープンしています。

ホテルOMO5小樽＜川嶋王志撮影＞

参考文献
「北海道毎日新聞」「小樽新聞」「北海タイムス」

⑯ JR小樽駅本屋及びプラットホーム

国登録有形文化財
2003年指定

昭和９年以後の小樽駅＜小樽市総合博物館 蔵＞

明治36(1903)年６月私鉄の北海道鉄道が蘭島～小樽中央間を開業し、小樽中央駅として今の小樽駅が開業しました。わざわざ「中央」をつけたのは、今の南小樽駅がすでに「小樽」を名乗っていたので、それと区別するためでした。小樽駅となったのは、北海道鉄道が国鉄となった後の大正９(1920)年７月のことでした。

今の南小樽駅も、開業時の開運町から住吉そして小樽、さらに南小樽と３回駅名が改称されており、このように隣り合った駅が３回も名前を変えている例は、国鉄(JR)では全国唯一です。

開業当時の駅舎は当時の皇太子(後の大正天皇)行啓(ぎょうけい)に備えて明治44(1911)年７月に建て直されましたが、昭和９(1934)年12月コンクリート造の現在の駅舎となりました。

小樽駅は地形の高低差をうまく利用して、駅舎とプラットホームを地下道で結んでいることが特徴のひとつとなっています。プラットホームの柱や屋根の骨組に使われている、さまざまな国から輸入された古レールも今では貴重なものです。

現在の小樽駅と同じような、正面から見て左右対称形で、中央の高い部分にコンコース・ホールを設け両側に待合室や事務室を配した鉄筋コンクリート造の駅舎は、小樽駅より規模は大きいものの上野駅や神戸駅が現存し、かつての岡山駅もそうでした。

小樽駅は平成15(2003)年に国の登録有形文化財になっています。

小樽駅＜川嶋王志撮影＞

裕次郎ホーム＜川嶋王志撮影＞

参考文献
『北海道鉄道百年史』上中下巻
(日本国有鉄道北海道総局、1976～1981年)
「小樽學」第39号 小樽の歴史的建造物
駒木定正(2012年)

⑰ 繁栄期の料亭、ホテル建築群

明治39年11月　開陽亭・大広間
「明石」〈小樽市総合博物館蔵〉

明治から昭和初期にかけて、経済都市としての発展に伴い、小樽の料亭、ホテルは質量とも北海道内で最も充実し、本州でも評判となるほどでした。当時、魁陽亭（開陽亭、海陽亭）、中島屋に続き、水天宮下・東雲町界隈などに、迎陽亭、高田屋、色内亭、千登勢、新中島、さくら家、嬉し乃、大政、阪内亭など数多くの一流料亭がありました。この界隈では、昼間から三味線や琴が響き、屋敷町の若旦那衆の小唄や長唄の声、北の学習院と呼ばれた堺小学校の児童たちが遊ぶ声、妙見堂にお参りする人たちの下駄の音や拍手が相まって、粋で風流な界隈を形成していたと言われます。魁陽亭は、北海道を代表する老舗料亭として全国的に認知されており、総理大臣の伊藤博文、経済人の渋沢栄一、俳優の石原裕次郎など、著名な政財界人や文化人等が来樽した際、定宿にしていました。大正期から英米人を中心に外国人の来樽が増加する中、老舗旅館の越中屋旅館は、昭和６（1931）年に越中屋ホテルを開業しました。海外客を中心に宿泊した小樽初の洋式ホテルの存在は、小樽の国際的な経済活動を反映しています。小樽の繁栄期、全道一の数を誇った料亭は昭和後期から近年までに次々と閉業し、建物も解体されていきましたが、旧魁陽亭と旧光亭の２件が現存しています。

仕事と遊びには相性というのがあるようです。物流基地だった小樽では物の動きが激しく、それに合わせて人も忙しく働くため、地味な遊びより派手な遊びを望み、必然的に「芸者を上げてパーッ」という心境になるのでしょうか。

昭和後期　越中屋ホテル（手前右）
〈小樽市総合博物館蔵〉

昭和53年　北海製罐株式会社罐友倶楽部（旧光亭）
〈小樽市総合博物館蔵〉

参考文献
『小樽市史第三巻』（小樽市、1964年）
『旧魁陽亭―北海道を代表する老舗料亭―』
（小樽商科大学グローカル戦略推進センター、2021年）
『着地型観光商品づくりのための素材集』
（NPO 法人OBM 企画・発行、2021年）
『北海道の近代和風建築』（北海道教育委員会、2007年）

① 旧魁陽亭

小樽市指定歴史的建造物第2号
1985年7月指定

海陽亭・大広間「明石」昭和後期＜小樽市総合博物館 蔵＞

創業は江戸時代末に遡り、明治初期に現在地で営業を始めたと伝わりますが、明治29(1896)年に住ノ江大火で建物は焼失し、同年に再建されました。北前船主や商店主たちに親しまれたことに始まり、国内外の政財界人、文化人が来樽した際に訪問する、北海道を代表する料亭となりました。創業以来、魁陽亭・開陽亭・海陽亭と亭名を変えつつ、平成27(2015)年の閉店まで150年以上にわたって営業を続けた老舗でした。開陽亭の時代、明治39(1906)年11月、日露戦争後の樺太境界画定委員会議が小樽の日本郵船㈱小樽支店で行われた後、祝宴が大広間「明石」で開催されています。その後、昭和７(1932)年１月、「海陽亭」に改名し、宮松家三代の女将のもてなしにより全国的な知名度を誇るようになりました。

---

② 旧越中屋ホテル＜現 UNWIND HOTEL & BAR 小樽＞

小樽市指定歴史的建造物第16号
1988年7月指定

UNWIND HOTEL & BAR 小樽＜UNWIND HOTEL & BAR 小樽 蔵＞

昭和６(1931)年、越中屋ホテルとして建てられ、その後10年間ホテルとして運用されました。アール・デコ様式のデザインが特徴的です。昭和17(1942)年、日本陸軍総司令部の将校クラブ、昭和20(1945)年には終戦とともに米軍に接収されました、昭和25(1950)年には越中屋旅館に返還されましたが、昭和27(1952)年には大蔵省の所有となります。昭和30(1955)年に北海製罐が払い下げを受け、その後15年間独身寮と貸事務所となりました。老朽化により取り壊される計画が持ち上がりましたが、昭和61(1986)年、アドバンテスト社がゲストハウスとして購入し、原形をとどめて改修しました。平成５(1993)年、小樽グランドホテル・クラッシックとして開業しました。令和元(2019)年からUNWIND HOTEL & BAR 小樽となり、再生されました。

③ 旧光亭<北海製罐株式会社罐友倶楽部>

小樽市指定歴史的建造物第79号
2013年7月指定

北海製罐株式会社罐友倶楽部<川嶋王志撮影>

当初、東京信濃町の料亭「光亭」の小樽店として、昭和12(1937)年に建てられました。主屋の東側に３つの棟を配置し、中央の棟には茶室があります。各室の建具や照明器具等はそれぞれ異なる形・意匠で、繊細な配慮がなされています。初代女将の佐々木トミは、市内の山谷建築店に施工を依頼し、建築工事はオタモイ龍宮閣を建てた３人の棟梁が分担しました。昭和32(1957)年から建物を所有する北海製罐は、信濃町にあった同社の倶楽部と小樽のこの建物を交換し、社員用福利厚生施設「罐友倶楽部」として使用するようになりました。市内で現存する料亭建築は旧魁陽亭とこの旧光亭の２件のみで、繁栄していた小樽の料亭文化をいまに伝える貴重な建物といえます。

参考文献 『北海道の近代和風建築』（北海道教育委員会、2007年）

⑱ 小 樽 運 河

令和元年　小樽雪あかりの路の小樽運河〈川嶋王志撮影〉

海と丘にはさまれた小樽には平地が少なく、明治時代のはじめから海岸を埋め立てて土地をつくりだすことが計画されました。明治29(1896)年には埋め立て計画の調査を始めましたが、近代的な埠頭(ふとう)では予算の問題もあり、実行にうつすのは難しいことでした。こうしたなか、明治41(1908)年になり、小樽港の防波堤をつくった元小樽築港事務所長の廣井勇の意見により、埠頭をやめて埋めたてによる人工の島をつくる、いわゆる「運河方式」が採用されました。小樽運河は大正３(1914)年着工し大正12(1923)年竣工(しゅんこう)です。

こうしてできあがった運河でしたが、すでに埠頭に接岸して直接荷役(にやく)のできる汽船の時代になり、運河を必要とするはしけによる荷役はすでに時代遅れとなりはじめていました。昭和に入り、昭和２(1927)年から始まった小樽港第二期修築工事では埠頭建設が進められ、昭和７(1932)年にはまず堺町岸壁が完成します。こうして小樽でも埠頭の時代を迎え、汽船による大量の荷役が可能となり、物流基地としての小樽はますます発展していくこととなりました。

昭和の「民の力」の象徴である「小樽運河保存運動」を経て完成した現在の小樽運河の概要は、全長1,140m、「北運河」と呼ばれるエリアは幅40mあり、当時の姿を残しています。観光客が多く集まる散策路が整備されているエリアは、長さ650m、幅20mとなっています。深さは平均2.5m、石畳は花崗岩(御影石)でイチョウ張り90万個、欄干はブロンズ製で254枚、ガス燈の数は63基あります。平成２(1990)年12月20日に長さ490mの運河北端散策路が完成しています。

プリストマン式浚渫(しゅんせつ)船の作業

運河内荷役の状況

バケツ鋤鏈式浚渫船の作業

ポンプ喞筒式浚渫船の作業

大正12年以前〈小樽市総合博物館 蔵〉

参考文献　『小樽なつかし写真帖』総集編第２巻（小樽なつかし写真帖編集委員会、2010）
「小樽新聞」「北海タイムス」ほか

⑲ 奥沢水源地水道施設

階段式溢流路〈川嶋王志撮影〉

大勢の人に安全な水を供給する水道は、飲料のほかにも伝染病予防や火災への備えとしても大切でした。公共水道ができるまでは、開運町に明治11(1878)年にできたのをはじめ、小規模な私設水道がありました。

小樽の公共水道は明治41(1908)年1月着工された後も、勝納川の出水のほか、水源地でもダムがくずれるなどの難工事が続きましたが、明治44(1911)年には一部が使用開始され、消火栓と水道共用栓が設置されています。大正3(1914)年にはすべて完成しています。

100年以上にわたり小樽の水源として重要な役割を果たし、景勝地としても市民に親しまれた奥沢水源地は、平成23(2011)年にダムから水がもれていることがわかり調査をしたところ、ダムに問題が見つかりました。すでに小樽市の給水は朝里ダムが90パーセント以上を占め、奥沢水源地の役割は低くなっていたことや、このまま修理をしないとダムがくずれるおそれもあることから、同年8月奥沢水源地は廃止されています。

そこで奥沢水源地といえば「階段式溢流路(いつりゅうろ)」が有名です。現在奥沢水源地は水源地として機能を果たしていませんが、階段式溢流路では水が流れているのを見ることができます。放水路の一部の施設として、21メートルの落差を10段の「水ため階段」によって水の勢いを和らげています。

溢流路落口及放水路階段

貯水池全景

鉄管敷設工事〈小樽市総合博物館蔵〉

参考文献 『小樽なつかし写真帖』総集編第2巻（小樽なつかし写真帖編集委員会、2010）
「小樽新聞」「北海タイムス」ほか

⑳ 運河完成後の倉庫群

澁澤倉庫（手前右側の白い2棟）＜川嶋士志撮影＞

大正後期に小樽運河沿いに建築された３件の倉庫群です。いずれも運河完成後に建設され、木骨石造、木骨煉瓦造、鉄筋コンクリート造などの倉庫となっています。運河とともに歴史的な景観を形成し、様々なかたちで商業施設として活用されています。

大正期、第一次世界大戦の時は小樽の倉庫業にも好景気をもたらし、明治時代をしのぐ活気に満ちていました。旧浪華（なにわ）倉庫は、中堅倉庫業者で、小樽運河完成２年後の大正14(1925)年、運河の埋め立てた側に建築しています。赤煉瓦造りが目を引く篠田（しのだ）倉庫も同年に建築されています。澁澤倉庫は、小樽の将来性に注目した渋沢栄一が大正14(1925)年に取得しました。倉庫としての役割を終えた後、これらの倉庫は飲食店などとして様々なかたちで活用され、小樽観光の重要なスポットとして親しまれています。

昭和中期 篠田倉庫（左側の煉瓦蔵）＜小樽市総合博物館 蔵＞

参考文献
鈴木商店記念館 HP
「渋沢栄一ゆかりの建物に脚光」『北海道新聞』(2019年４月17日)

① 澁澤倉庫<運河倉庫 北海あぶりやき>

澁澤倉庫<川嶋王志撮影>

有望な港町となった小樽に注目した渋沢栄一は大正４(1915)年、小樽に渋澤倉庫を開業しましたが、小樽運河完成２年後、大正14(1925)年、運河の出入り口にあたる場所に、新たに倉庫を入手しました。倉庫は現在も同社の所有で飲食店として活用され、観光客や市民に親しまれています。壁面には赤で「りゅうご」の印が記載されています。この印は、渋沢の生家が養蚕(ようさん)や藍(あい)の染料を扱っており、糸巻き具が、鼓(つづみ)を立てたように見えることから、「立鼓(りゅうご)」と呼ばれています。左側の倉庫が大正14年に今井商店から入手した「渋沢Ｂ号倉庫」で、角が丸くなっているのは、かつて運河の出入り口だった名残り。昭和16(1941)年、右側に「渋沢Ｃ号倉庫」が新築されました。

---

② 旧篠田倉庫

小樽市指定歴史的建造物第63号
1995年11月指定

篠田倉庫<川嶋王志撮影>

小樽運河の完成２年後、大正14(1925)年に篠田商店の倉庫として建設された木骨煉瓦造倉庫です。小樽運河の海側に建つ連続した倉庫群の中でも、赤煉瓦造り２階建ての倉庫は小樽では珍しく、一層存在感を放っています。大同倉庫の所有となり、高度成長期には飼料などを貯蔵する倉庫として活躍していました。その後、雑貨店、レストランとして活用されていましたが、平成17(2005)年頃、撤退。平成21年には外国人観光客向けのレストランとなりましたが、短期間で営業終了となりました。後運河沿いの壁は、平成８(1996)年の改築工事で新しい煉瓦に取り替えられていますが、古い色合いになるように工夫が施されています。

③ 浪華倉庫（なにわ）＜旧小樽運河食堂＞

小樽市指定歴史的建造物第77号
2012年10月指定

小樽運河食堂時の浪華倉庫＜川嶋王志撮影＞

大正期に日本一の年商を誇った鈴木商店の先兵的な役割を果たした浪華倉庫によって、小樽運河の完成２年後、大正14(1925)年に建築された木骨石造倉庫です。床面積約2,000㎡と、市内に現存する木骨石造倉庫の中でも比較的大型の倉庫となっています。屋根には、当時採光用として設置された円形の小屋根があり、荷物を搬出入する開口部は、海側の壁面のほか運河側にも配置され、はしけに荷積みしやすいように工夫されています。近年、多数の飲食店が入店する小樽運河食堂として活用されてきましたが、新型コロナウイルスの影響で閉店となりました。令和３(2021)年９月、ニトリがこの建物を取得し、色内地区で展開する小樽芸術村の４施設目として美術館に改装予定です。

㉑ 北海製罐倉庫㈱事務棟・工場・倉庫

昭和初期 北海製罐工場株式会社<小樽市総合博物館蔵 兵庫コレクション>

北海製罐倉庫㈱事務棟、工場、倉庫は、大正11(1922)年～昭和10(1935)年にかけて、小樽運河の埋立地に建設された製罐会社の工場、事務所、倉庫で、艀荷役の最盛期を象徴する建造物群です。日露戦争後、明治40(1907)年の日露漁業協約によってロシア領カムチャッカ沖の北洋漁業が本格化します。明治43(1910)年、堤商会(現・北海製罐)がカムチャッカに最初の缶詰工場を建設し、翌年、ロンドンに鮭の缶詰を輸出したことがきっかけとなり、汽船の採用と缶詰工場を主体とする「工場制工業的漁業」へと発展していきました。大正10(1921)年、北海製罐倉庫は日露漁業の全額出資を受けて、小樽の北浜地区に創設されました。埋立地に最初に缶詰工場を建設した東洋製罐から事業と建物を譲り受け、鉄筋コンクリート造２階建ての第一、第二倉庫を建設。大正13(1924)年には、埋め立て区画のほぼ中央に第三倉庫が竣工しました。主な建築は昭和10(1935)年までに建てられ、第二倉庫、第三倉庫、工場、事務所が現存しています。令和２(2020)年、北海製罐㈱から小樽市に第3倉庫解体検討の方針が示されたことで、民間組織「第３倉庫活用ミーティング」が立ち上がり、保全・活用の方向性がまとめられました。令和３(2021)年12月、第３倉庫は小樽市に無償譲渡され、小樽港のランドマークとして保全・活用に向けた取り組みが始まりました。

昭和初期　北海製罐第三倉庫と月見橋
<小樽市総合博物館 蔵>

参考文献
駒木定正
「北海製罐小樽工場と小樽運河創設の関連について」
『日本建築学会大会学術講演梗概集』
(建築歴史・意匠、2011年８月)
『「これまでの100年」から「これからの100年」へ
北海製罐㈱小樽工場第３倉庫の保全・活用に向けて』
(第３倉庫活用ミーティング、2021年)

㉒ 小樽市総合博物館所蔵９.５ミリ動画資料

9.5ミリカメラ＜小樽市総合博物館 蔵＞

昭和初期に撮影されたこれらのフィルムには当時の市井の光景がとらえられ、戦前全盛期の小樽の商店街を行き交う一般市民のようすや町並みがとらえられています。冬季の映像には幅広い道路の中央にうずたかく積まれた雪が写され、幅が極端に狭くなっている道路に市民が難渋しているようす、ニシン漁を取材したフィルムでは、具体的にどのような作業がなされていたのかがわかります。また「ハレ」の光景だけではなく、普段着の生活が写されていることは、当時の日本全体の経済情況から考えてみても貴重であり、かつそれがごく少数にとどまらずかなりの数に上ること、さらに長期にわたり伝えられてきたことも特筆されるべきことです。文献資料では得られない、こうした映像のもつ視覚に直接訴える情報はたいへん価値が高いといえます。

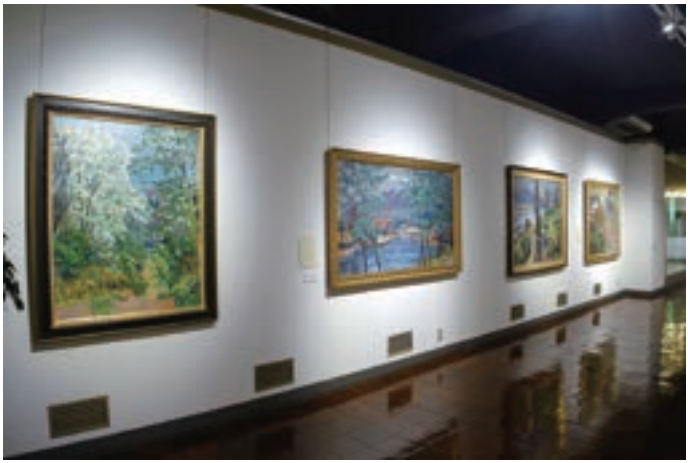
輸入品だったパテベビー（9.5ミリフィルム）に写された動く映像には、写真などにはない情報も得られます。このフィルムが撮影されたころの小樽には、フィルムばかりか撮影機や三脚などが買え、現像できる店または取次店があった（自分で現像するときは、薬品などが手に入る）ことがわかります。さらに写真と違い、映写機も必要でしたから、それらを扱かったり修理したりできる店もあったのでしょう。

こうした高価なものを趣味として個人で買える資産家がいたこと、そうした求めに応じられる店があったこと、これらは小樽が経済的、文化的にたいへん盛んだったことを物語っています。

9.5ミリ動画
＜小樽市総合博物館 蔵＞

参考文献
『小樽なつかし写真帖』総集編第２巻
（小樽なつかし写真帖編集委員会、2010）
「小樽新聞」「北海タイムス」ほか

㉓ 中村善策風景画



市立小樽美術館 中村善策記念ホール〈川嶋王志撮影〉

小樽は、全国的に見ても特筆されるほど、画家が多彩な美術作品を生み出したまちです。中でも、画家・中村善策（ぜんさく）は、大正期から昭和にかけて小樽の風景を描いた作品群を数多く発表し、全国的にも高い評価を受けています。中村の作品には、小樽の起伏に富んだ地形、四季折々の小樽が長期間にわたって描かれており、これらの作品群は歴史資料としても貴重です。中村は幼少期から小樽倉庫を建設した北前船主として知られる西谷家に才能を認められ、小樽実業補習学校を卒業後の大正５（1916）年に西谷回漕店の社員となり、勤務しながら小樽洋画研究所に通い、本格的に絵画の道に進みました。神戸支社に転勤となった４年間、中村は西谷家６代目正治（しょうじ）と頻繁に手紙のやり取りをし、展覧会に出品し続けました。中村が上京を決意する直前の半年間、西谷家の厚意で提供された地獄坂脇の山道先の山荘に籠（こ）もり絵画に没頭し、疲れた時は正治からもらった文学書や詩集を読みふけりました。大正14（1925）年、二科展に初入選し、翌年一挙３点が入選しますが、これらは小樽の山荘で描いた作品です。その後、写実の一水会に移り、充実した作品を発表していきますが、終生小樽を描き続けました。没後、昭和63（1988）年、市立小樽美術館に「中村善策記念ホール」が開設されています。

参考文献
高野宏康
「小樽へ進出した北前船主・西谷家」
『人文研究』（138・139輯、小樽商科大学、2020年）
鈴木正実
『中村善策 風景との対話』（北海道立近代美術館、1990年）

㉔ 小樽運河を守る会関係資料

昭和58年小樽運河百人委員会チラシ　道路を一本港寄りに提案

「小樽運河を守る会」は昭和48(1973)年に発起人会が結成され、昭和50(1975)年設立、そして昭和59(1984)年に会長の峯山冨美の辞任を以て実質上組織は終焉に向かいます。「小樽運河を守る会」は小樽運河保存運動を牽引し、昭和の「民の力」を象徴することに加え、その後の観光都市開花への導火線になりました。

「小樽運河を守る会関係資料」は、小樽市総合博物館の所蔵を指しますが、ほかにも小樽運河の保存運動にかかわる新聞切り抜き、チラシ、ポスター、その他の資料群があり、2021(令和3)年８月３日に「峯山冨美没後10年展」を主催した「小樽運河新世紀フォーラム」が収集した膨大な数にのぼります。

したがって一言では表現できませんが、小樽運河を守る会が「運河の保存」から「運河の活用」に発展し、「歴史的建造物の保存」から「歴史的建造物の活用」に波及する、小樽独自の文化と経済の創造を発信し、さらにはこの「文化財の動態保存」を基底にした小樽のまちづくりを体系化する働きを後世に与えたといえましょう。この影響は、一地方都市小樽にとって今も実践を蓄積する現在進行形の壮大なストーリーなのです。

昭和53年７月８日
第１回ボートフェスティバル〈志佐公道撮影〉

参考文献

『小樽運河保存の運動 歴史篇・資料篇（２冊）』
（「小樽運河問題」を考える会、1986年）
『小樽運河史』（小樽市職員共済会、著/渡辺悌之、1979年）
『小樽志民　運河保存運動の市民力』
（社会評論社、著/石井伸和、2018年）

関係資料

新聞切り抜き761点、
守る会の運河ニュース５点、請願書３点、
広報おたる８点、チラシ19点、ポスター２点、
色紙71点、ほか
＜小樽運河新世紀フォーラム収集＞

㉕ 藤森茂男作風景画

藤森茂男
＜藤森茂子 蔵＞

赤い運河＜藤森茂子 蔵＞

藤森茂男は学生時代(1958年卒業)、デザインの語源がラテン語のデジナーレから転化したことを学びました。

それまでデザインとは、自動車の造型やポスターなど個々の構図と認識していましたが、藤森はデジナーレを「計画を記号に表す」という意味と解釈しました。たとえば都市計画(どういう街にするか)という計画に沿って個々の建物の造型も相応しいものにするということです。藤森は「古い建物がこんなに残る小樽は、これを大切にした都市計画を講じるべきだ」と、現場の「記号(古い建物)」に沿った「計画」を小樽は建てるべきだと考えました。

藤森の代表作には、
1984年：「秋の小樽運河」
　　「冬の小樽運河」
1985年：「赤い運河」「夏の小樽運河」
　　「春の小樽　運河」

作品はおよそ150点、スケッチブックの点数を入れるとその数倍はあります。藤森の描いた運河は物流機能の衰退期に該当し、いわゆる「寂れた運河」です。小樽運河保存運動の創設者であった藤森は、この寂れた運河にどんなイマジネーションを浮かべていたのでしょうか。昭和62年に享年49歳で亡くなった藤森は、昭和61年に再開発され、今日のように多くの観光客で賑わう運河を見ていません。

参考資料
『デジナーレ』（著/堀井 清孝、発行/やまとびと編集部、2009年６月29日）
『小樽運河絵はがき3セット（9枚・10枚・7枚）』（運河画廊）
『月刊おたる クローズアップ人』（1989年３月）
『月刊ダン 人物東西南北』（1987年３月）
新聞切り抜き 16点
新聞切り抜き 赤旗新聞連載「小樽運河」５回
藤森茂子氏取材、2021年12月14日

写真提供
運河画廊絵葉書　※資料・写真いずれも「運河画廊」蔵

㉖ 兵庫写真コレクション

兵庫勝人 氏
＜小樽市総合博物館 蔵＞

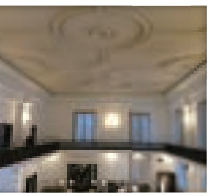
＜小樽市総合博物館 蔵＞兵庫写真コレクション（運河の廃船：昭和50年頃）

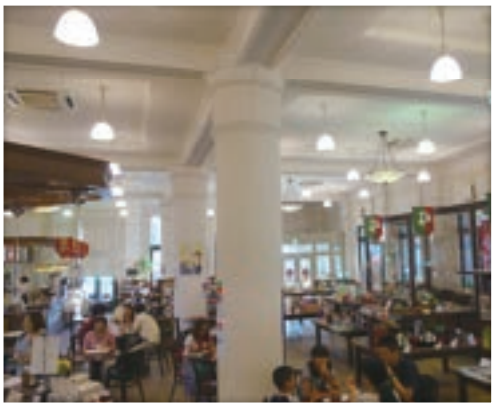
兵庫コレクションは、昭和50年代、港湾業の不況や繊維産業の移転などにより、大手銀行の支店撤退が促進され、衰退に歯止めがかからない背景での、小樽の姿を記録した写真群です。昭和50(1975)年から昭和55(1980)年にかけて、小樽を撮影し続けた、札幌出身のプロ写真家・兵庫勝人(かつんど)(1942－2004年)のコレクションとして、小樽市総合博物館に寄贈・保存されています。５年間の撮影期間で写真枚数は約5,000枚にのぼります。廃船が放置され、寂れた小樽運河の様子など、かつてのにぎわいを失った小樽の風景を切り取った写真のほか、従来の「小樽らしい」撮影視点とは異なり、車では入ることのできない細い路地裏や住宅街の奥深くにまで入り込み、当時の小樽の日常生活をモノクロで捉えた写真であることが特徴となっています。繁栄、衰退、そして再生の歴史を辿ってきた小樽の近現代史の中で、衰退期の小樽の姿を記録した極めて貴重な資料といえます。これらの写真群には、運河保存運動を経て観光都市として再生・変貌する前の小樽の姿が映し出されており、戦後の小樽の貴重な画像資料といえます。平成28(2016)年には小樽商科大学江頭ゼミの学生が、当時と同じ場所の現在の様子を同じ構図で撮影し、まちなみの変化を比較する写真展等を開催しました。

参考文献
『小樽　昭和ノスタルジー　我が青春の街角へ』
（株式会社ぶらんとマガジン社、2013年）
『小樽市歴史文化基本構想』
（小樽市教育委員会、2019年）

「北海道の心臓」

新たなストーリー提案





新たなストーリー提案は、既述の構成文化財が点から線や面へ展開したことに対し、昭和の「民の力」が、点から線や面へ展開したストーリーとしてご提案するものです。

＜写真：川嶋王志撮影＞

物流基地から「人流の街」へ

構成文化財の概要

これまで解説してきた「北海道の心臓」の構成文化財は、物流基地となった近代の小樽から、「人流（観光）の街」となった現代の小樽への変遷です。物流基地では、港湾商業を基幹産業とし埠頭や倉庫、商店や銀行などが「線」や「面」として紡がれてきたストーリーですが、「人流の街」では、観光業を基幹産業として紡がれるストーリーを「点」として抽出したのみで、「人流の街」のストーリー化が不足しています。したがってここでは、現代の動きを「点」から「線」や「面」に展開してきたことに焦点を当て、新たなストーリーをご提案するものです。

物流基地 ＜小樽市総合博物館 蔵＞

小樽運河保存運動の学びと発信

小樽運河保存運動では「小樽運河研究講座」が開催され、昭和54（1979）年から３年で３回に及び全27講開催したことをはじめ、「学びながら運動」する中で都市計画や地域経済など多角的な学びをヒントに、保存関係者によって議論された多くの発信がありました。たとえば「小樽の歴史的建造物を再活用しよう」「小樽の歴史的建造物はこんなに価値がある」「小樽らしい商品を扱おう」「観光都市としての品格を持とう」などの発信を後世の人々が実践し、今日の観光都市に変貌してきました。中でも歴史的建造物の再活用は今日の小樽観光を牽引してきたといっても過言ではありません。ここでは歴史的建造物の再活用を追うことによって、「点」が「線」や「面」に拡大してきた過程を振り返ってみます。

オタルサマーフェスティバル＜小樽市広報広聴課 蔵＞

①「歴史的建造物活用」への「点」（昭和50年代初期）

昭和50（1975）年開店の「叫児楼（現二代目叫児楼）」や、昭和52（1977）年開店の「海猫屋（現ISO）」は小樽運河保存運動が展開される初期にあたり、積極的に歴史的建造物を再活用した最初の事例でした。しかしこの時期はまだ、小樽市民の誰一人として小樽が観光都市になるなどと想像もしていませんでした。いずれも「なんか風変わりな喫茶店」といった市民認識でしたが、一方で若者達の人気店となり、小樽の現代史においても画期的な手法で、まさに「人流の街」への序章として「歴史的建造物活用」の最初の一点でした。

二代目叫児楼 ＜川嶋王志撮影＞

ISO ＜川嶋王志撮影＞

②「歴史的建造物活用」へ連鎖した「点」（昭和50年代後期）

昭和58（1983）年は小樽運河保存運動の終期間近でしたが、寂れかけた問屋街に「北一硝子三号館」が誕生しました。誰もが「問屋街に観光施設？」「石造倉庫に観光施設？」「小樽が観光都市に？」などと驚いて来館しました。天井の高い空間、ランプ燃焼の匂い、会場全体に発光するランプのゆらぎ、別棟の倉庫に陳列された手づくりの硝子の輝きは、疑問を抱いて入館した人々を、まさにファンタジックな世界に誘うに十分で、人流の街への突破口として「歴史的建造物活用」が観光に向けて連鎖する「点」でした。

北一硝子三号館北一ホール内観 ＜川嶋王志撮影＞

③「歴史的建造物活用」の「線」への展開（昭和60年～平成初期）

昭和58(1983)年の北一硝子三号館の衝撃と成功は、小樽市民の投資を呼び込み、歴史的建造物が次々に観光施設に変貌してきました。昭和58(1983)年「小樽倶楽部(現UNGA↑)」、昭和60(1985)年「小樽市博物館(現小樽市総合博物館運河館)」「カフェさかい家(現くぼ家)」「JAZZ 喫茶フリーランス」、昭和61(1986)年「新生小樽運河竣工」、昭和63(1988)年「中国料理レストラン好」、平成元(1989)年「小樽オルゴール堂」、平成２(1990)年「小樽運河プラザ」、平成３(1991)年「ホラ吹き昆布館」など、運河沿線や堺町、色内の歴史的建造物再活用が小樽資本によってラインナップしてきました。ここに人流の街へ向けて「歴史的建造物活用」が「線」として展開されてきたことがうかがわれます。

旧さかい家 現くぼ家内観
〈川嶋王志撮影〉

中国料理レストラン好
〈川嶋王志撮影〉

④ 歴史的建造物調査による再活用土壌

平成６(1994)年『小樽市の歴史的建造物』が小樽市教育委員会から発行されますが、実際に調査にあたった日本建築学会北海道支部歴史意匠専門委員会は、小樽全域の悉皆調査により、一次調査で2,357棟、二次調査で代表的な508棟の歴史的建造物を発掘し、詳細なデータ集として上梓されました。

さらに平成７(1995)年『小樽の建築探訪』が北海道新聞社から発行され、123棟の美しい写真やデータが小樽再生フォーラムによって上梓されました。

『小樽市の歴史的建造物』は、比較的行政関係や建築関係の人々のバイブルとして、『小樽の建築探訪』は一般の人々のアイストップとなり、「歴史的建造物の街小樽」の印象を浸透させる大きな貢献を果たしました。これらは小樽の「歴史的建造物活用」に向けた「線」への基礎的データとなりました。

小樽市の
歴史的建造物

小樽の建築探訪

⑤「歴史的建造物活用」に共鳴した「線」への展開（平成中期）

小樽の歴史的建造物再活用の波は止まりません。平成中期には小樽外の資本の共鳴を呼んで、その輪が広がっていきます。平成３(1991)年「ふじ鮨」、平成11(1999)年「小樽ビール」、平成14(2002)年「北菓楼」「六花亭」、平成15(2003)年「浪漫館」に続き、小樽資本の後続や、あえて小樽に移住した市民による起業にも波及してきました。

そして令和３年には、小樽全市域におよそ200棟の歴史的建造物再活用がラインナップしていき、まさに「点」からスクランブルするように多角的な「線」が引かれてきました。

これが人流の街小樽を成立させるにあたって、内外資本を問わない「歴史的建造物活用」の「線」化と見ることができます。

ふじ鮨内観 ＜川嶋王志撮影＞

浪漫館内観 ＜川嶋王志撮影＞

小樽ビール内観 ＜川嶋王志撮影＞

小樽観光に「面」的展開をしたコンテンツ

昭和61(1986)年に再生された「小樽運河」から、その周辺に位置する堺町や南運河沿線、そして色内通りの歴史的建造物活用が促進されてきました。同時に、観光施設のコンテンツ、つまり商品として「硝子」「オルゴール」「寿司」が評判を呼び、「面」への展開が進められてきました。

① 小樽の質感としての硝子

小樽の歴史的建造物は歴史的というだけあって色彩はシックです。このシックな建物の中に光り輝く「硝子」はまさに異次元世界への誘いでした。さらに手触りの硬質感は歴史の重みに誘う働きをしてくれました。

さてその小樽の硝子の歴史を紐解くと、明治34(1901)年、浅原久吉(北一硝子の祖)が九州より北海道へ渡り、小樽で石油ランプの製造を始めます。電気が普及していない当時、石油ランプは人々の生活必需品でした。さらに明治43(1910)年には漁業用の浮き玉の製造も始めています。

＜北一硝子ホームページ＞

北海道で硝子の浮き玉を最も多く使用したのは樺太や千島での北洋漁業でしたが、小樽近海のニシン魚でも使われていました。

＜余市水産博物館＞

ここでいう硝子は建材で使用する板硝子ではなく、いわゆる手づくりの吹きガラスです。

こうした背景の中で、北一硝子を契機として、小樽には多くの硝子工房が移植されていきます。昭和54(1979)年「ザ・グラス・スタジオ・イン・オタル」、昭和62(1987)年「GLASS MURANO」、平成14(2002)年「ガラス工房田沼」、平成15(2003)年「STUDIO J-45」、平成19(2007)年「硝子工房 NAKAMORI」など、これらの工房が「小樽の硝子」の層を厚くし、小樽の飲食店においても硝子の器で盛りつけられるなど、人々の生活に入り込むほど「面」への展開が進んできました。

小樽の硝子製品 ＜提供：大正硝子ギャラリー蔵＞

② 小樽の音感としてのオルゴール

小樽の近代には「音の風景」が根付いていました。船の霧笛、蒸気機関車の汽笛、時間を示す午砲やサイレンなどに小樽市民は慣れ親しんでいました。昭和後期にはそれらの多くは聞かれなくなり、平成期に入って新たな音が加わります。オルゴールの音色です。平成元(1989)年「小樽オルゴール堂」、平成２(1990)年「海鳴楼」が登場し、オルゴールは硝子と並んで小樽土産の代表格になってきました。ちなみに平成16(2004)年に小樽オルゴール堂前に設置された、15分おきに汽笛を鳴らす「蒸気時計」も「音の風景」として小樽に定着しています。

小樽にオルゴールが根付いた動機は、「レトロな街並みに似合う音色」という直感で、小樽にはオルゴールの歴史的な背景はありませんでしたが、歴史的建造物を活用して商品をディスプレーして聞こえるフィット感は「小樽のオルゴール」ブランドに重要な演出をしてくれたことは間違いありません。

海鳴楼内観 ＜川嶋王志撮影＞

小樽オルゴール堂内観 ＜川嶋王志撮影＞

蒸気時計 ＜川嶋王志撮影＞

③ 小樽の味覚としての寿司

観光に欠かせないのが食です。地元小樽市民に愛される、いわゆるソウルフードは、高度経済成長期に根付いていましたが、寿司もその一つでした。寿司は小樽でも明治時代から食されていましたが、今のような寿司専門店は少なく、和食あり、洋食あり、鰻もだせば、寿司もだすといった料理屋が普通でした。そのなかでも明治41(1908)年開店の「蛇の目」は「蛇の目寿司」と伝えられていたばかりでなく、「寿司」と看板に大書していた店としては、小樽での寿司の歴史に欠かせない存在です。ちなみに「蛇の目」経営の加藤秋太郎は昭和９(1934)年、小樽のオタモイ海岸に「龍宮閣」を造り、全国から多くの観光客を集め有名となり、小樽観光事始めとして重要です。

そして昭和61(1986)年以後に多くの観光客が運河を目当てに訪れてくるようになり、「せっかく小樽へ来たのだから」と、小樽らしい食べ物を求める需要が高まります。一方小樽では、昭和62年に鰊をはじめとした「魚供養祭」が地元の一部の寿司店の結束から誕生し、これが「小樽寿司屋通り会」に発展し、寿司が観光に接点を持つようになります。今日の「小樽寿司屋通り」の前身です。昭和62年当時、小樽寿司屋通りには５店舗しかありませんでしたが、現在では約20店舗が営業し、小樽市内全体では100店舗以上の寿司屋が腕を競っています。

小樽の寿司 ＜日本橋提供＞

小樽観光に学びを付加した文化財

小樽運河保存運動を契機として小樽観光がはじまり、歴史的建造物再活用が「点」から「線」になり、ここに硝子・オルゴール・寿司が「面」への展開となってきました。こうして新たな「面」的展開で、知的な需要に応え市民の誇りになっていく「文化財」への働きかけも小樽観光の格式として欠かせません。

文化財への「面」的展開では、「民の力」が牽引してきたことに加え、「官民協働」という理想的な「面」様はまさに、原点であった小樽運河保存運動の祈願でもありました。この文化財における「官民協働」の最新版は、令和元(2019)年に民間の実行委員会と小樽市の共催で開催された「小樽100年プロジェクト・セミナー」にあります。その動きは下記以外にも波及し、公的な認定を目指す準備も進められています。

●昭和後期以後の文化財指定

①旧日本郵船株式会社小樽支店
～昭和44(1969)年国指定重要文化財～

②JR小樽駅
～平成18(2006)年国指定登録有形文化財～

③旧手宮鉄道施設
～平成19(2007)年国指定重要文化財～

④旧青山家別邸
～平成22(2010)年国指定登録有形文化財～

⑤「北前船」
～平成30(2018)年日本遺産認定～

⑥「炭鉄港」
～令和元(2019)年日本遺産認定～

⑦旧三井銀行小樽支店
～令和3(2021)年国指定重要文化財～

小樽観光を豊かにした案内人

次なる「面」的展開なくして心豊かな観光にはなりません。小樽観光を詳細に説明してくれるガイドです。平成14(2002)年には「小樽おもてなしボランティアの会」「小樽観光ガイドクラブ」、平成18(2006)年には『おたる案内人』を養成する「小樽観光大学校」、そして平成30(2018)年には『おたる案内人』有資格者の有志で自主的に設立した「おたる案内人ボランティアガイドの会」が次々に誕生してきました。

ガイドこそが「見て感動する」観光から、「知って訪ねる」交流への窓口になります。交流には「発見」の動機が待ち構え、「発見」は自主的な小樽関与を働きかけ、「移住」の重要な動機となっています。

小樽観光の黒子まちづくり運動

全国1718(2021年現在)ある自治体の中で、小樽では突出するほど多くのまちづくり団体が誕生してきました。昭和50(1975)年に「小樽運河を守る会」が誕生以来、令和３年に至るまで、86団体が設立されています。これだけでも全国レベルで稀な数です。それらは「この建物を保存しよう」「この地区の歴史景観を守ろう」「軟石造は小樽らしいから残して活用しよう」「守るに相応しいコンテンツを移植しよう」といった歴史的建造物再活用に向けた運動母体が過半数を占めています。

このような市民目線の運動が立ち上がり、そのアピールが世論として浸透してくると、対象物件に投資する人々が登場します。したがって運動を「シーズ(種蒔き)」、投資を「ニーズ(刈り取り)」としたストーリーにとらえることができます。つまりまちづくり運動は観光資源を発掘する機能を果たし、人流の街への土壌づくりを担い、「民の力」で紡がれた歴史は、今日「官民協働」に開花してきたといえます。

未来へ紡がれる小樽

小樽のまちづくり運動も、小樽の観光も、それぞれ「点」から多様な「線」と「面」に展開してきましたが、このような体系的展開を可能にしたのは、小樽が自ら歴史に育まれた個性を自覚していたことによるでしょう。とはいえ時代はいつも新たな波を送ってきます。これらの波に流されたり押し潰されたりしないためにも、市民一人一人の徹底した議論と同時に、継続と変革への行動力が問われます。地域の歴史は世界に向かって開かれ、未来に向かって紡がれていく生き物のようなもので す。「民の力」はもとより「官民協働」や「産官学連携」によって、後世に残す価値あるまちづくりと、私たち一人一人の心の持ちようを大切にできたらと願います。

小樽100年プロジェクト・セミナー ＜川嶋王志撮影＞

「北海道の心臓」

プロット

プロットは、構成文化財で記したストーリーが大局的な視点でまとめたものに対し、調査の過程で特筆すべき視点をまとめたものです。

＜写真：石井伸和 蔵＞

旧手宮鉄道施設

～内陸の石炭をどうして小樽まで？～

明治12年カムイコタンの工事
〈小樽市総合博物館 蔵〉

明治７(1874)年、開拓顧問となったホーレス・ケプロンは、後に鉄道技師ジョセフ・ユリー・クロフォードを呼び寄せ、北海道内陸の幌内から港のある地域に運ぶ鉄道をつくる検討をします。クロフォードは札幌－小樽間の難所といわれたカムイコタン(張碓)を含めた札樽間を、多くの土木作業員と共に、着工からわずか5 ヶ月後の明治12(1879)年12月に歩道だったところに馬車道を完成させました。そうです。初めて小樽へ来る人々がJRで札幌から乗って銭函・張碓を通るとき、海岸線から真近な海を見て驚くほど感動するあの景色です。まさに小樽のランドマークとなっているあの景色の起点はクロフォードに行き着くのです。

旧手宮線散策路 その1

～散策路なのにどうして鉄路があるの？～

鉄路のある旧手宮線散策路＜川嶋王志撮影＞

昭和60(1985)年に手宮線が廃線になりますが、廃線時の小樽にとってこの手宮線は、まさに中心市街地に位置していたことから、この長い遊休地の活用議論が高まりました。軌道輸送による事業の採算性や住民アンケート等の調査結果をもとに、オープンスペースとして活用する方向性となり、平成８(1996)年「鉄路を残した散策路」に決定、平成28(2016)年に約1.7キロメートルにわたって散策路整備を終えました。

現在は、NPO 法人 北海道鉄道文化保存会によって線路沿いの一部に花壇が整備され、トロッコを運行するイベントが開催されるなど活用が図られています。

また、小樽の冬の一大イベント「小樽雪あかりの路」の会場となっており、市民の散歩コースとしてだけではなく、観光客のインスタ映えスポットとして歴史を身近に体感できる場となっています。

旧手宮線散策路 その2

～複線から単線へ?～

旧手宮散策路＜小樽市 蔵＞

旧手宮線散策路には線路や一部の鉄道施設がそのまま残されています。これは一時期複線だったため敷地が広く、線路を残したままで遊歩道をつくることができたからで、このように手宮線の一部ですが廃線跡活用の好例ともなっています。北海道最初の鉄道であった幌内鉄道(後に手宮線)の歴史を歩いてたどることができ、手宮にある小樽市総合博物館ではその詳しい歴史を知ることができます。

小樽港防波堤 その1

～小樽運河公園にある胸像は?～

廣井勇胸像＜川嶋王志撮影＞

伊藤長右衛門胸像＜川嶋王志撮影＞

小樽運河公園は平成10(1998)年に完成しますが、平成11(1999)年に小樽港の功労者廣井勇と伊藤長右衛門の胸像が移築されました。さて廣井像は昭和４(1929)年、伊藤像は昭和17(1942)年にそれぞれ小樽港を一望できる小樽公園に建立されます。しかし何れの銅像も戦時中に供出(金属類の提供)されたため、戦後の昭和28(1953)年に小樽市議会の決議により、小樽公園に再建されました。ところが再建から半世紀近くも経ち、小樽公園の木々は成長し、銅像も草木に囲まれ、鳥の糞なども付着したまま放置されていたのを憂える人々が集い、「港に移そう」と「廣井勇・伊藤長右衛門両先生胸像帰還実行委員会」を組織し、小樽運河公園に移築することができました。

参考資料 『廣井勇君の小傳』
『伊藤長右衛門先生傳』『小樽市史』

小樽港防波堤 その2

～100年以上も耐えている？～

廣井勇が建設した小樽港第一防波堤は100年以上たった今でも立派に役目を果たしています。これは小樽港の地形や海底のようすを充分調べたうえ、海外の当時の先端技術を取り入れ、直接日本海の荒波が押し寄せる小樽港にふさわしい耐久性をもたせた廣井の設計、そして工事の優秀さを物語っています。

小樽港湾事務所みなとの資料コーナー収蔵
防波堤関係資料＜小樽市 蔵＞

北浜地区倉庫群 その1

～北前船で儲けたお金は？～

北前船という仕事は危険も大きいけれど利益も大きいのです。小樽に倉庫を建てた北前船主、西谷庄八、広海二三郎、大家七平たちは成功して大金持ちになりました。しかし明治中期には洋式帆船や蒸気船の時代を迎え、同時に各地物産の過不足情報も行き渡ると、北前船が得意とした「買い積み商法」も下降線を描いていきました。小樽に進出した北前船主たちの一部はこうした危険な体験から「日本火災海上保険(損保ジャパン)」に資本を転化させています。小樽には多くの成功した小樽商人がいましたが、資本の転化をして今日も内容を変えて継承されていると確認できるのは実に少ないといえます。

西谷　庄八
＜小樽市総合博物館 蔵＞

広海二三郎
＜小樽市総合博物館 蔵＞

大家　七平
＜小樽市総合博物館 蔵＞

北浜地区倉庫群 その2 旧小樽倉庫

～営業倉庫開始では小樽は早いの？～

三代目歌川広重「江戸橋三菱の荷蔵」通称七つ蔵 〈郵政博物館提供〉

旧小樽倉庫中庭でのイベント平成５年
＜小樽市広報広聴課 蔵＞

日本で初めて営業倉庫(倉庫業)を開始したのは、一説によれば、明治13(1880)年の三菱為替店(かわせてん)という銀行の前身とされています。銀行になぜ倉庫かというと、日本ではまだ資本主義経済が未成熟で、融資と同時に民間の物流ビジネスを支援する目的だったようです。倉庫では商品の保管、貸倉庫、運送業務を兼ねていました。三菱倉庫は明治20(1887)年、東京・深川で有限責任東京倉庫会社として創業していますので、明治27(1894)年に小樽倉庫が営業倉庫を開始したのは実に早い方だといえます。

明治以降、西洋型帆船や汽船が増えていくと、北前船主たちはより大量の荷物を運ばなければ採算が取れなくなっていきました。そこで、西出家と西谷家は、大型の木骨石造倉庫を建造し、荷物を保管・運送する倉庫業を始めました。小樽倉庫は、他者の荷物を往来に見せないよう中庭を設置し、船から見える目印として屋根にシャチホコを上げる等、工夫が凝らされています。

参考資料 『明治の巨人岩崎弥太郎』2011年　砂川幸雄著　日本経済新聞出版社
『世界大百科事典』平凡社

北浜地区倉庫群 その3 旧澁澤倉庫

～倉庫がライブハウス？～

平成22(2010)年からGold Stoneが旧澁澤倉庫を再生していますが、ライブハウスだけあって抜群な音響を施しています。そもそも軟石は大理石やコンクリートなどと異なり、隙間が多いため、音を反射したり逃がしたりする特徴があり、軟石造そのものでも一定の音響効果があるといわれます。Gold Stone では音の反射と吸収を科学的に工夫し、会場のどこから聴いても均一に聞こえる環境を整備しています。小樽の音楽プレイヤーの卵たちは「いつかはGold Stoneで」と暗黙の夢になっています。

北浜地区倉庫群 その4

～小樽が「北海道の心臓」となった時代の北前船主たちは？～

中央通り。右側手前が西谷海運株式会社
＜小樽市総合博物館 蔵＞

一般的に北前船は、江戸時代中期から明治時代にかけて活動したとされますが、小樽などに進出した北前船主たちも、その後も汽船海運業や営業倉庫業、鉱山経営など、北前船経営のノウハウを活かした新ビジネスに進出し、さらに飛躍していったものが多いことが特徴です。広海二三郎家は、大正初期頃まで西洋型帆船による北前船経営と汽船運賃積の海運業を並行して行っています。大家七平家は、明治35(1902)年に日本海一周定期航路を開設、大正15(1926)年には大家商事株式会社を設立し、近代的経営を進めていきました。西谷庄八家は、明治26(1893)年に小樽倉庫会社を開業後、明治29(1896)年に事業整理に追い込まれますが、回漕業に特化して再建に成功し、「東洋一の回漕店」と称されました。

北前船主たちの集合写真。
明治19(1886)年12月９日、小樽で撮影。
前列中央：五代目西谷庄八、同右：浜中八三郎、
同左：赤松清七郎、後列左：増田喜三郎、
同中央：広海二三郎、同右：11代目西出孫左衛門
＜個人蔵＞

左：西谷回漕店(西谷支店)。右側は小樽倉庫
＜小樽市総合博物館 蔵＞

南浜地区倉庫群　旧木村倉庫

～歴史的建造物再生観光施設第一号は？～

ニシン漁などで財を成した木村円吉は、明治24(1891)年、堺町に木村倉庫を建造すると、海岸付近に次々と倉庫を建造し、小樽の繁栄を象徴するまちなみが形成されていきました。しかし、昭和後期になると小樽の衰退とともに堺町通りの問屋街もすっかりさびれてしまいます。昭和55(1980)年、北一硝子の浅原健蔵氏が倉庫内部を見たところ、「昼でも夜だ」とランプ屋にとって最高の物件だと直感し、昭和58(1983)年に北一硝子三号館を開館しました。同館は小樽の人気観光スポットになり、全国から観光客が押し寄せるようになりました。北一硝子三号館は、堺町通りが観光商店街となるきっかけとなり、観光都市・小樽の出発点となったといえます。

北一硝子三号館北一ホール＜川嶋王志撮影＞

旧岡崎倉庫 その1

～旦那衆（だんなしゅう）って？～

小樽の「民の力」を象徴する「寄附」には七五調のこんな俗諺が残っています。「板谷宮吉小樽市中、藤山要吉公会堂、木村円吉商大土地、土肥太吉は市庁舎で、山田吉兵衛山田町、岡崎謙は能舞台、広海大家大鳥居、寿原外吉寿原邸、白鳥ちよ子は水道で、野口のキーチャン(喜一郎)シャンツェなら、奥山富作写真集、秋野武夫の資料館」

「旦那」とは、仏教用語で財物を寄附する人という意味もあります。言い換えると私財を投じて公共事業をすることですが、全盛期の小樽商人にはこのような余裕があったことを物語っています。この中の「広海大家大鳥居」は北前船主の広海と大家が明治32(1899)年に住吉神社の大鳥居を寄進したことをいいますが、この二人は故郷の石川県加賀市瀬越では私財を投じて公共事業をしてきたことから、「ご両家様」と住民から尊敬を集めています。

小樽市公会堂能舞台＜川嶋王志撮影＞

明治32年以後　大鳥居の麗姿燦然たる住吉神社＜小樽市総合博物館蔵＞

旧岡崎倉庫 その2

～文化は引き継がれているの？～

能舞台で舞う三ツ江匡弘
＜旧岡崎家能舞台を生かす会 蔵＞

旧岡崎倉庫の岡崎謙は自宅に、故郷に根付いていた「宝生流の能」を移植しましたが、その後、小樽市に寄贈された能舞台を活かそうと、昭和61(1986)年「能に親しむ会」を佐藤繁夫が働きかけ商大学長の山田家正が会長として運営。さらにこれを継承すべく平成19(2007)年「旧岡崎家能舞台を生かす会」を三ツ江匡弘が会長となると同時に自らも舞い、平成30(2018)年には遠藤友紀雄に会長が継承されています。

どんなに素晴らしい芸能でも、引き継ぐ人がいなければ途絶えてしまいます。宝生流の能を岡崎が移植し、佐藤・山田が継承、さらに世代が代わり三ツ江・遠藤がリレーのように引き継いできたことは、このストーリーは未来に向かって紡がれているといっていいでしょう。

色内銀行街 その1

～ウォール街？～

小樽の銀行街＜川嶋王志撮影＞

小樽の銀行街を「北のウォール街」と表現するのは自由ですが誤解です。ニューヨークの金融街をウォール街と俗称していますが、高層ビルが天に届くような「壁(Wall)」との印象は、由来からすると間違いです。ニューヨークがニューアムステルダムといわれていた1653年に、オランダ人ストイヴェンサントが家畜が入り込まないように城壁を築いたことから「ウォール街」の俗称がはじまりました。秦の始皇帝が北方の異民族の侵攻を防ぐために万里の長城をつくり、東西冷戦時に東ドイツが自国の体制を守るためにベルリンの壁をつくったように、いわば混乱を防ぐためのウォールなのです。その名残からウォール街といわれていますが、小樽には混乱防止の壁をつくった記録はないし、高層ビル街ともいえないので、誤解を招く表現といえそうです。

（参考資料：世界大百科事典）

色内銀行街 その2

～渋沢栄一と小樽の関わりは？～

右側手前の⧖印が現 澁澤倉庫

近代日本を代表する経済人の一人、渋沢栄一は、自ら監査役・頭取を務めた第一銀行の小樽支店を明治20(1887)年に設置し、渋澤倉庫を開設するなど、小樽と深い関わりを持っています。渋沢は来樽した際、開陽亭(旧魁陽亭。当時の名称)を利用していました。明治41(1908)年、北海道各地を巡覧中の渋沢は８月16日から19日まで小樽に滞在し、小樽区長や経済人との会合など、激務の合間に開陽亭でくつろぎ、歓迎会を楽しんでいます。大正４(1915)年には営業主となって発足させた澁澤倉庫株式会社の出張所を小樽に開設し、その後も同社の倉庫を多数設置しています。澁澤倉庫は、当時不正が横行していた小樽の倉庫業界の近代化を進めることを期待されていました。渋沢と小樽の深い関わりから、当時の小樽が日本経済を支える重要な「北の商都」であったことが伺えます。

色内銀行街 その3

～あの小樽運河を守る会の峯山冨美も色内銀行街で？～

昭和初期・銀行街＜小樽市総合博物館 蔵＞

明治から昭和初期にかけて「北日本一の経済都市」と呼ばれた小樽の繁栄を支えた色内銀行街は、当時、世界中と商取引が行われ、活気に満ちていました。後に小樽運河を守る会の会長を務めた峯山冨美は、昭和８(1933)年に旧三菱銀行(現・運河ターミナル)内にあった三菱商事に就職し、石炭を取り扱う燃料部に勤務していた当時の様子を「東京方面からの転任者で垢抜(あかぬ)けた銀行員がこの通りを颯爽(さっそう)として歩いていた」と手記に綴っています。この建物は三菱系の拠点ビルで、１階は銀行、２階は鉱業、３階は商事の各支店となっており、最先端の鉄筋コンクリート造、４階建てのエレベーターが設置されたモダンなビルは現存し、当時の雰囲気をいまに伝えています。

色内銀行街 その4

～百十三銀行の建物活用は小樽のまちの歴史？～

大正期 通称妙見通りに建つ百十三銀行
現 臨港線はまだ海＜小樽市総合博物館 蔵＞

堺町通りと妙見川の交差点にある旧百十三銀行小樽支店(現・小樽浪漫館)は、小樽の歴史と共に様々な変遷を遂げました。明治41(1908)年に建設され、小樽経済を支えたこの建物は、合併統合を経て住友銀行になりましたが、昭和36(1961)年、衰退した小樽から銀行が次々撤退する中、閉鎖されます。その後、潮まつりの創設や運河保存運動で活躍した藤森茂男の会社兼住居となり、山口保をはじめ小樽運河を守る会関係者等が頻繁に出入りするようになりました。昭和52(1977)年に同社閉業後は菓子店の千秋庵、平成15(2003)年には小樽浪漫館となり現在に至ります。経済都市・小樽を支えた銀行から、運河保存運動関連、そして観光関連の店舗となったこの建物には、小樽の歴史が凝縮されています。

色内通り、堺町通りの商店 その1

～一本道なのにどうして通り名がちがうの？～

昭和初期 堺町通りから色内通りを望む ＜小樽市総合博物館 蔵＞

堺町と色内は共に小樽市の正式町名ですので、たとえ一本道でも、堺町にあれば「堺町通り」、色内にあれば「色内通り」といわれ、このような事例は全国にあります。さて両通りは色内通りの方が堺町通りより幅が少し広くなっています。堺町の山側には水天宮の丘があったことや、都市計画よりスピードを要求されたビジネス背景があったからと思われます。この幅の違いがそれぞれの特徴を形成していたようです。いずれも明治初期に埋め立てをし、平地を少しでも造成していますが、明治中期の色内通りには郵便局、学校、裁判所、検疫事務所、病院といった公共施設や、銀行、宿泊施設が建てられてきたのに対し、堺町通りには呉服店、小間物などの商店が建てられ、どちらかというと色内通りの方に大きめの建物が残されています。

参考資料 『小樽歴史年表』(NPO法人 歴史文化研究所、2006年)

色内通り、堺町通りの商店 その2

～どうして堺町が小樽で最初の観光ストリートに？～

昭和初期　堺町から色内通りを望む
左側に第一銀行、右側に三菱銀行

小樽堺町通り商店街は令和２(2020)年、色内大通りの中央通り手前まで拡大しました。この商店街のエリアは、小樽有数の歴史が凝縮した地域です。明治14(1881)年の大火後、入船川河口周辺に北前船と取引する商人たちが移転してきて、問屋街が形成されていきました。現在、北前船主や北陸ゆかりの商店などの建物は再生されて店舗に活用されています。堺町通り商店街の北側には、日本の近代化を担い小樽港から積み出される石炭を取り扱った三菱商事小樽支店、そして明治末から昭和初期にかけて「北海道の心臓」となった経済都市・小樽の中枢である、色内銀行街があります。この区域は、「北前船」「炭鉄港」と２つの日本遺産、「北海道の心臓」の日本遺産候補地域など、小樽の歴史ストーリーのすべてに深く関わっています。

小樽観光の目玉となった運河から歩いて回れる通りであると同時に、古い建物が蓄積されていたことで、小樽で最初の観光ストーリーになりました。

旧小樽商工会議所

～商工会議所って？～

旧小樽商工会議所＜川嶋王志撮影＞

小樽の産業は鰊漁を除くと商業(卸売業)が先行し、明治30年代に情報収集と技術向上を目的として、商業の同業者組合も盛んに組織され、最も大きな組織が明治28(1895)年に「小樽商業会議所」の設立でした。昭和３(1928)年商工会議所法の施行により、「小樽商工会議所」に改称し、製造業や小売業、サービス業なども加入し、小樽の経済界を代表する組織になってきました。同じ経済団体でも同業組合は「情報収集と技術向上」を目的としますが、会議所はそれに加え「地域の経済環境を整備する」目的も備わっていることから、「民の力」の経済部門では今日も最も重要な位置づけです。

繁栄期の料亭、ホテル建築群

～都市の成熟度って？～

なにもないところに、いきなり料亭やホテルは建ちません。人口が増え経済が活性化し、地域外からも人が訪れ、その動きを促進させる装置として、遊びもてなす必要が生まれ、料亭やホテルができます。小樽もご多分に漏れず、商業繁栄を前提として料亭やホテルが誕生してきました。

小樽に残り活用されている料亭やホテルは、時代の風潮を反映し、和式と洋式にそれぞれ特化した姿を残しており、その良さを活かそうとするいくつかの事例を確認することができます。

UNWIND HOTEL & BAR 小樽 洗練された食堂
〈UNWIND HOTEL & BAR 小樽蔵〉

UNWIND HOTEL & BAR 小樽 洗練されたエントランス
〈UNWIND HOTEL & BAR 小樽蔵〉

小樽運河 その1

～小樽港民って？～

大正12年以前　運河以前の海岸部
＜小樽市総合博物館 蔵＞

どんどん貨物船が小樽港に入って来た明治後期、当然小樽港も効率的な港湾整備が必要になってきます。そんな時期、とくに幌内炭礦と鉄道を運営していた民間の北海道炭礦鉄道会社は、手宮地区の埋め立てを計画していたといわれ、「一企業のための港ではない」と社会問題に発展します。明治32(1899)年に小樽初の区議会議員選挙が行われ、これに立候補した寿原重太郎（すはらじゅうたろう）は「小樽港民たるもの」と呼び掛け、一企業の我がままで公の港の使い方を決めることを反対しています。普通であれば「小樽区民」ですが「小樽港民」という言葉は、以前から使われ「世界に開かれた港は公のためにある」との気概を感じます。「港民」という言葉は、この頃小樽だけで使用されていたわけではありませんが、「公を思う気持ち」として今日も伝えられています。

小樽運河 その2

昭和中期　艀の並ぶ小樽運河

〈小樽市総合博物館蔵〉

～はしけって？～

「はしけ」とは基本的に動力を持たない平坦な船で積み荷を運ぶ船をいいます。

大正12(1923)年に完成した小樽運河は、はしけが効率的に物資を積みおろしできるようにつくられました。小樽へ陸あげされる物資は、沖どまりする汽船等からはしけへおろされ、曳舟（ひきふね）にひかれたはしけは運河に入って接岸し、そこで倉庫へ荷あげされました。多数のはしけの荷役が同時にできるように、はしけは岸壁と直角に係留されました。そのため運河には、はしけが係留されていても航行に支障のない幅が確保されていました。最盛期の大正13(1924)年には、はしけは600隻にもなり、貨物の積み卸しをするはしけ業者は235社、そこで働く沖仲仕といわれた港湾労働者も1300人以上いたと記録されています。倉庫が建ち並ぶ運河の周辺は、昼夜を問わず物資の積み卸しで賑わっていたのです。

参考資料 『小樽運河史』(小樽市職員共済会、1979年)

運河完成後の倉庫群

～大きな石造倉庫と小さな石蔵は違うの？ 昔と今も違うの？～

蕎麦処藪半の石蔵席＜川嶋王志撮影＞

石造倉庫と石蔵は、物を保管する目的で耐火にし、木骨石造という建築的構造は同じですが、石造倉庫は海岸線、石蔵は市街地に多く建てられ、規模と保管内容が大きく違いました。石造倉庫は物流基地の小樽を支え、石蔵は商売道具や個人財産の保管場所であると同時に、商売人として「蔵持ち」の誇りもありました。

このように昔は保管ですのでいずれも「他者の目にはふれない場所」といった印象がありましたが、時代を経て今日の石造建築物の再生は、不特定多数の人々が出入りし交流する「他者同士が交流する場所」に変化しています。「えっ倉庫がミュージアム？」「えっ石蔵が宿泊施設？」そんな異次元の驚きですが「なんか小樽らしいね」という落とし処が粋なのではないでしょうか。

JAZZ喫茶フリーランスの石蔵ライブ
＜フリーランス 蔵＞

December3の石蔵ギャラリー
＜川嶋王志撮影＞

北海製罐倉庫㈱事務棟、工場、倉庫

～第三倉庫の行方は？～

令和３年の北海製罐第三倉庫〈川嶋王志撮影〉

官民協働の組織第３倉庫活用ミーティングは令和３(2021)年１月に発足し、勉強会、周辺地域との整合性の研究、見学会、絵画展、ライトアップ、劣化調査、シンポジウム等を開催し、事業に伴うクラウドファンディングの結果、同年９月に提言書「北海製罐小樽工場第３倉庫の保全・活用に向けて」を小樽市長に提出しました。その後、市長と所有者の北海製罐との話し合いの結果、製罐側から市に建物を無償譲渡に加え1,000万円の寄附を賜りました。ミーティングの活用構想としては、「これまでの100年、これからの100年」と題し、「市民交流・活動拠点」「文化・人材育成拠点」「持続可能なローカルツーリズム拠点」という３つのコンセプトを掲げ、「登録有形文化財申請」「土地利用の変更」と同時に、第１フェーズ(令和３～７)として「運営体制」「建物補修」「ブランディング・情報発信」「社会実験」を遂行し、第２フェーズ(令和８～)として「本格活用」「ブランド維持・情報発信」を推進していく計画です。

小樽における歴史的建造物保存運動からみると、行政と所有者、深い認識を持つ関係者の活動もあり、「まず保存」に決まったことは画期的な出来事です。

小樽運河を守る会関係資料 その1

～負けた保存派の主張が勝った埋立派の主張を飲み込んだ？～

第１回小樽運河研究講座記録〈石井伸和 蔵〉

「賢者は歴史に学び愚者は経験に学ぶ」といわれますが、小樽運河問題では、物流で発展した小樽の経験から埋め立てを選んだ側と、歴史の学びから保存再生を提案した保存派がいました。

小樽では、小樽運河保存運動によって、負けた側の保存派が発信した提案を後世の人々が実践しました。「小樽運河研究講座」においては３年で３回に及び全27講座開催し「学びながら運動」しました。また保存派の訴える対象は一般の人々で、その賛同が「世論」となり、道内や全国にも多くの賛同者を獲得しました。これらは、小樽が観光都市に生まれ変わった背景となっています。

小樽運河を守る会関係資料 その2

～小樽方式？～

原型を残した北運河＜川嶋王志撮影＞

水源地機能の一部であった溢流路が、そのまま残っています。このようにかつての小樽近代化に貢献したインフラが、その面影を色濃く残し、不特定多数の人々が楽しめる文化財として整備されています。これら近代化遺産はもとより歴史的建造物や乗物などが再生されることは、小樽方式の観光の目玉になると同時に、小樽市民になくてはならない風景として息づいています。このようなまちづくりを小樽運河保存運動は強く提起していました。

レールを残した旧手宮線散策路＜川嶋王志撮影＞

階段式溢流路を残した旧水源地＜川嶋王志撮影＞

藤森茂男作風景画

～藤森茂男の哲学？～

藤森茂男画　冬の小樽運河＜藤森茂子 蔵＞

藤森は小樽の「本物」は運河であり、運河保存運動も絵画も本物を人の意志で描く「創造」と考えていました。そして「真の創造は本物以外からは生まれない」という哲学に至ります。本物や本質を見極める研ぎ澄まされた想像力と言っていいでしょう。

藤森がこのような洞察をする土壌は、日頃の新しさへの好奇心にあったようです。「守ることは新しさを知り取り入れること」と認識していました。このように藤森茂男は対立的なものを、自らの心の中で矛盾させることなく手をつなぎあう関係に昇華させていたのです。

兵庫写真コレクション

～原風景って？～

昭和50年代前期　稲穂3丁目の路地裏
〈小樽市総合博物館蔵兵庫コレクション〉

小樽運河を守る会会長であった峯山冨美にとって、小樽の原風景は彼女が勤務のために訪れた大正後期の印象でした。運河が完成し銀行街が次々に建ち並ぶ、小樽が最も発展していた時代です。これに対し写真家兵庫勝人の撮影の動機は、現代(昭和50年代)の顔を探していたようです。スクラップ＆ビルドの様子ではなく、それに取り残されていく斜陽小樽の路地裏にある「ひだ」や「しわ」をファインダーにおさめたのが特徴的です。これもまた兵庫が感じた原風景といえるのではないでしょうか。

その他の準構成文化財

小林多喜二関係資料(市立小樽文学館、小樽商科大学所蔵)

～多喜二は小樽を愛していたの？～

小樽の旭山展望台に小林多喜二の文学碑(昭和40.10.９建立)があり、そこには「冬が近くなるとぼくはそのなつかしい国のことを考えて深い感動に捉えられている　そこには運河と倉庫と税関と桟橋がある　そこでは人は重っ苦しい空の下を　どれも背をまげて歩いている　ぼくはどこを歩いていようがどの人をも知っている　赤い断層を処々に見せている段のように山にせり上がっている街を　ぼくはどんなに愛しているか分からない」と友人に宛てた手紙の一部が刻まれています。この中の「ぼくはどこを歩いていようが　どの人をも知っている」と言い切る情熱を想像してください。多喜二が生活していた頃の小樽は、発展の頂点にありましたが、貧困に苦しむ人々も多くいるなかで、彼の優しい気持ちから、いつも悩んでいたと想像できます。「どの人をも知っている」は「どの人をも救いたい」と解しても不思議ではなく、「小樽」というより、「小樽で必死に生きている人々」を愛していたと言っていいのではないでしょうか。

その他の準構成文化財　稲垣益穂日誌

明治中期　小樽波止場移民漂着ノ景＜北海道文書館 蔵＞

～昔の移民気質は？～

稲垣は当時、教育の立場にいて小学生や小樽に住む人をこう記しています。「内地にも不良の生徒は往々あるが、これ程に賭博的精神は発達して居ぬ」（明治36年４月20日）

「余は小樽の他の学校は知らぬが～中略～此稲穂学校の如き盗賊問題の多い学校は始てだ。～中略～内地の失敗者、手あまし者、札付等、其土地に居り困しきもののにげこむに極めて便宜的な土地」（明治39年12月６日）

明治２(1869)年から昭和元(1926)年までの北海道への移民は227万人との記録がありますが、その多くは小樽港に上陸し、道内でそれぞれ目指す地域へ移動しました。上陸地の小樽で定住した人々で小樽の人口が膨れていきました。移民の多くは方言同士でコミュニケーションもうまくとれなかった中で、元気を維持することが必須だったのでしょう。まして小樽は物流基地でしたので物が主で人は歯車のような存在、したがって細やかな心の機微より気性の荒さが勝ったと思われます。

参考資料
「稲垣益穂日誌」各巻（小樽市博物館・小樽市総合博物館、1984年～）
「小樽新聞」「北海タイムス」

「北海道の心臓」と

まちづくり運動

「北海道の心臓」の構成文化財は、これをテーマとして歴史的文化的に貴重ゆえに選ばれましたが、「貴重」という世論に浸透するまでには、直接・間接問わず様々なまちづくり運動が土壌をつくっています。小樽は全国でもまちづくり運動が活発な地域になりますが、以下に影響を与えた運動を記します。

＜写真：石井伸和 蔵＞

1 手宮線や車両保存に関する運動

構成文化財

「旧手宮鉄道施設」
「小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群」
「旧手宮線散策路」

北海道鉄道文化協議会「C62-3号機の小樽－ニセコ間動態保存」昭和61年＜小樽市広報広聴課 蔵＞

まちづくり運動

北海道鉄道文化協議会
「C62-3号機の小樽－ニセコ間動態保存」1986−
小樽フロンティア21「北海道鉄道発祥の意義の普及」1993−
北海道開拓鉄道協議会「小樽交通記念館開館セレモニー」1996
小樽まちづくり協議会「旧手宮線の活用」1996−
小樽・鉄路・写真展「写真と手宮線によるまちづくり」2000−
小樽鉄道写真展「露天会場による写真展」2001−
NPO法人北海道鉄道文化保存会「鉄道文化のまちづくり」2008−

小樽まちづくり協議会「旧手宮線の活用」平成８年＜小樽まちづくり協議会＞

② 港に関する運動

構成文化財

「小樽港北防波堤」
「小樽港湾事務所みなとの資料コーナー所蔵防波堤関係資料」

まちづくり運動

小樽運河を守る会「運河の保存」1973−1984
ポートフェスティバルインオタル実行委員会
　「運河周辺のポテンシャリティを表現」1978−1994
小樽運河ロードレース「健康増進」1989−
小樽塾「商都小樽の復活」1995−
廣井勇・伊藤長右衛門胸像帰還実行委員会「歴史偉人の顕彰」1999
NPO法人潮騒の街おたる「水辺を生かしたまちづくり」2001−
おたる浅草橋サマーフェスティバル実行委員会
　「市民と運河の関係強化」2004−
舫実行委員会「港の活性化」2005−
後志鰊街道普及実行委員会「後志広域観光プロダクラム」2005−2007
小樽浅草橋オールデイズナイト「オールデイズナンバーとまちづくり」2009−
北海道ジャズ「ジャズとまちづくり」2010−
第三倉庫コアミーティング「北海製罐第三倉庫保存運動」2021−

平成18年　後志鰊街道普及実行委員会　報告書
＜石井伸和蔵＞

第三倉庫コアミーティング「北海製罐第三倉庫保存運動」令和２年＜コアミーティング＞

3 歴史的建造物保存に関する運動

構成文化財

「小樽運河」
「奥沢水源地水道施設」
「北浜地区倉庫群」
「南浜地区倉庫群」
「旧岡崎倉庫」
「旧日本郵船株式会社小樽支店及び附属倉庫群」
「日本銀行旧小樽支店」
「旧三井銀行小樽支店」
「色内銀行街」
「色内通り、堺町通りの商店」
「旧小樽商工会議所」
「JR小樽駅本屋及びプラットホーム」
「繁栄期の料亭、ホテル建築群」
「運河完成後の倉庫群」
「旧北海製罐倉庫㈱事務棟、工場、倉庫」

まちづくり運動

小樽運河を守る会「運河の保存」1973−1984
ポートフェスティバルインオタル実行委員会
「運河周辺のポテンシャリティを表現」1978−1994

ポートフェスティバルインオタル　昭和53年＜志佐公道撮影＞

小樽青年会議所「歩こう。見よう。小樽ふるさとへの路。」1979–1992
小樽ルネサンス21「新産業革命」1982–
小樽再生フォーラム「運河保存の精神継承」1985–
オタルサマーフェスティバル実行委員会
　「銀行街のポテンシャリティを表現」1986–1994
能に親しむ会「岡崎家能舞台と能の復興」1986–2006
北海道中小企業家同友会小樽支部青年経営者懇談会
　「小樽の歴史小冊子」1993
小樽観光誘致促進協議会「観光の振興」1998–2007
NPO法人小樽トラスト「歴史と文化のまちづくり」2002–
NPO法人歴史文化研究所「歴史を未来の資源に」2004–
小樽教育旅行誘致促進実行委員会「教育観光プログラム」2005–
小樽観光大学校「観光人材育成」2006–
小樽ワークス「坂牛邸の再生とアートなまちづくり」2008–
旧岡崎家能舞台を生かす会「能舞台利用促進と再建」2007–
堺町にぎわいづくり協議会「堺町活性化と浴衣文化促進」2009–
NPO法人小樽民家再生プロジェクト「古民家再生」2012–
NPO法人OBM「観光戦略と北運河再開発」2012–
旧三井銀行小樽支店研究会「歴史的建造物研究」2017–
小樽色内復興会準備会「色内のまちづくり」2018–
小樽100年プロジェクト「歴史まちづくり運動と国の政策リンク」2019–
小樽商工会議所歴史まちづくり委員会「歴史的建造物保存」2019–
第三倉庫コアミーティング「北海製罐第三倉庫保存運動」2021–

オタルサマーフェスティバル　昭和62年＜小樽市広報広聴課 蔵＞

4 歴史資料保存に関する運動

構成文化財

「小樽市総合博物館所蔵9.5ミリ動画資料」
「中村善策作風景画」
「小樽運河を守る会関係資料」
「藤森茂男作風景画」
「兵庫写真コレクション」

まちづくり運動

小樽市総合博物館友の会「博物館支援」1959–
市立小樽美術館協力会　「美術館支援」1979–

昭和50年代前期　兵庫コレクション<小樽市総合博物館 蔵>

「文化と生きるまち」

小樽の新たなライフスタイル

日本遺産をバネに観光振興を目指すと同時に、実は小樽には文化を大切にしたライフスタイルがすでに根付いています。ここでいうライフスタイルとは、歴史的建造物や古民家とともに生きることを指しています。日本遺産の構成文化財ではなくても、古い建物を残すには、残し生かす「人」がいなければ叶いません。

ここでは小樽に根付く新たなライフスタイルの紹介をさせていただきます。

＜写真：川嶋王志撮影＞

Café & Hostel 石と鉄

オーナー　中源（なかげん）　博幸（ひろゆき）氏

■住所：小樽市色内2丁目2-8
■電話：0134-61-1214
■E-mail.stoneandiron.otaru@gmail.com

～交流から活用される文化財通りづくり～

堺町と色内通りは一本道ですが、この通りは小樽が最も栄えていた明治後期から昭和初期を牽引した問屋や銀行、石造倉庫や石蔵が密集しました。その色内通りの石蔵を再生してカフェと宿泊施設を営む「CafeBar and Hostel 石と鉄」を平成28(2016)年にオープンしました。

国内の飲食業界を経験し海外でも働いた経験をもとに、故郷の小樽でこれからの小樽に必要だと思う飲食店を目指したお店を作りたいと思っていました。

色々な人のご縁があり、この石蔵と出会いました。お客様には地元と観光客が混在していることで、私の意図する営業方針「交流」にとって恵まれた客層です。また英語が通じるインバウンドに対しても交流を促し、お客様同士で仲良くなることを心掛けています。カフェや宿泊運営は私の生業となりましたが、ただ単に経済的なことばかりではなく、「交流」を通して文化の創造をはかる楽しみを感じています。

この100年前に建てられた石蔵が今となって、新しく活用されることにより「過去と未来」の小樽を表現できるお店でありたいと思っております。

これからは色内通りそのものが「活用される文化財通り」になればと思います。

石と鉄カウンター
＜川嶋王志撮影＞

株式会社 サニーホームワークス

代表取締役　川嶋（かわしま）　王志（きみし）氏

■住所：小樽市富岡1丁目23-8
■電話：090-3773-3848
■E-mail.kimishi212@royal.ocn.ne.jp
■Facebookページ
「いつまでも、小樽にあり続けてほしい家・店がある」管理者

～ファインダーを通した大好きな小樽づくり～

学生時代まで小樽で過ごしましたが、長い間諸所でサラリーマン生活をしておりました。どこにいても、盆正月は必ず帰省しておりました。たまに帰省するからこそ、あの建物が無くなった、あの看板が無くなった……と気が付くことも多々ありました。あの日東日本大震災を、富山で迎え、テレビに映し出される津波の惨事に、故郷のことを想いました。子供の頃からの、あの建物、あの景色は永遠だと思っていた自分の幻想に気が付きます。

人生の最後を小樽に決めてからは、自分の思い出作りの為に大好きな小樽の様々なシーンをファインダーで切り取る趣味を楽しんでいます。

“その建物がそこにある理由”を、時間の経過、歴史とともにこれからも探っていきたい。それは、自分を見つめ直す貴重な時間でもあるからです。

緑地区の三角屋根
＜川嶋王志撮影＞

有限会社 利尻屋みのや

代表取締役会長　簑谷（みのや）　修（おさむ）氏

■住所：小樽市堺町４-６
■電話：0134-25-4060

～これが小樽ですか？～

利尻生まれの私は少年時代、小樽と利尻・礼文を結んでいた利礼航路を辿った商人からいつも小樽の華やかな様子を聞いて育ち、いつしか自分もそんな華やかな小樽で一旗挙げたいと純粋に憧れていました。そしてめでたく就職し小樽で暮らしながら、小樽の歴史を調べる中で、「やっぱり小樽はすごい！」と確信を持つようになりました。そうすると現状の小樽を見るにつけ「これが小樽ですか？」と情けなさを感じるようになったのです。あの進取の気性の小樽商人は？ 物資が右から左、左から右に行き交う活気は？ 若いピチピチした女性は？ 川の沿線に垂れる柳下を人力車に乗った芸者は？ 全国でも近代化の先端を施した技術者は？ そして昭和の成長期に助け合った人々は？・・・。

小樽に憧れ続けている私は、かつての映像が生きる信念になり、形を変えても継承したいと思うようになりました。なぜならかつての映像を呼び覚ます建物や橋、運河、線路などがちゃんと残っているから、十分蘇生は可能なのです。たとえば「明治の街並み」「大正の街並み」「昭和の街並み」の復活です。私の脳裏に残っているあのときの小樽はすべて文化財なのです。それを文化財とするなら、小樽は活用するノウハウが集積されています。まだまだ諦められません。

小樽出世前広場＜川嶋王志撮影＞

旧澁澤倉庫
Press Cafe

オーナー　稲葉（いなば）　圭計（よしかず）氏

■住所：小樽市色内3丁目3-21
■電話：0134-24-8028
■E-mail.presscafe@palette.plala.or.jp

～異次元の異空間でファンタジーってなんのこっちゃ～

私はクラシックカーが好きなことから、全道のクラシックカー愛好家の一員で、仲間達の交流の場も含めて、札幌でカフェを開設していましたが、建物が取り壊しになるため物件探しをしました。

知人にこの倉庫を教えていただき、北運河全体の空気に感動し、「ここで暮らしたい」と思い平成18(2006)年に移転しました。当初は誰も来なくてクラシックカー仲間が応援してくれましたが、次第に地元や観光客も訪れてくれるようになりました。

小樽は札幌に比べ異次元な街です。その中でも北運河は異空間そのものです。ここでカフェを運営していることは現代ではファンタジーそのものです。このような環境が残っていることが奇跡です。換言すれば奇跡的な環境でファンタジーな使い方をするのが、小樽なのですね。クラシックカーへの愛着から発した私のライフスタイルです。

Press Cafe外観
＜川嶋王志撮影＞

NPO法人 猫のシェルター Ariel

代表　西谷（にしや）　理加（りか）氏

■住所：小樽市相生町2-21
■電話：090-3390-8454
■E-mail.rikariel0248@gmail.com

～保護猫と見つけた新しい小樽ライフ～

小樽生まれ、小樽育ち！潮まつりと石原裕次郎を愛するアラフィフの猫専門ペットシッターです。

進学をきっかけに20歳から札幌で生活をしていましたが、小樽で暮らす野良猫のことをたくさんの人たちに知ってほしいと思い〈特定非営利活動法人　猫のシェルター　アリエル〉を設立するため、再び小樽市民となりました。

小樽の街は近隣の市町村と比べ、飼い猫も野良猫も多いという地域性から、小樽で保護された猫を小樽の人に譲り渡すことが街に良い流れを作るのでは？と思い、活動を始めて１年が経ちました。

猫のシェルター
Arielの猫たち
<Ariel 蔵>

猫に関するNPO法人ということで、猫に興味のある人以外にはメリットがない…と思われるかもしれませんが、現在、猫を保護した人、新しい家族、お手伝いをしてくれる人、動物病院の先生方を始め様々な形で応援をしてくれる人たちの集まる新しいコミュニティ作りが進んでいます。

更に飲食業や福祉関連等、他のコミュニティとも繋がりを持つことで、様々なライフスタイルを提案することもできるのでは？とも考えられるようになりました。

相生町にある保護猫シェルター（築50年の古民家）では、ご近所や東雲、花園に住むマダム達が猫のお世話や新しい家族探しを手伝ってくれています。

年齢性別は問いません。古き良き文化と歴史の中で生活してきた小樽の皆さん！新しい小樽ライフを私と一緒に見つけてみませんか？きっと毎日が楽しくなりますよ！

Hands on Toys kinderlieb

店長　杉本（すぎもと）　英樹（ひでき）氏

■住所：小樽市住吉町4-4
■電話：0134-24-1031
■E-mail.2003@kinderlieb.info

～なんという矛盾、もしかして矛盾～

地理的には小樽観光地区の一番端っこに位置（いち）しながら、沢山ある小樽の木骨石造づくりの建物の中では、かなり地味な部類に属するコンテンツをそろえ、平成19(2007)年に改造しました。北海道なのに何故かドイツ製の輸入玩具中心の(それも幼児教育系)おもちゃを、観光客向けというよりは地元のお客さんを意識しながら、関西訛（なま）りで接客しているという、考えてみると不思議な店をやり続けて20年近くになりました(最初の数年はショッピングモールでの営業)。

経営的に見れば矛盾だらけの展開で、ずっと低空飛行ながらなんとか墜落は免れてきたのは、もしかしたらこのチグハグだらけのお店の在り方が、トータルには何処にもない不思議な唯一の魅力を放っているのかもしれません。それをちょっと過信して、高い家賃を払ってまで観光地区にいる必要はない、札幌に移転しようと考えたこともありました。そして手始めに小さく２号店を円山に出したところでコロナと共にピンチがやってきました。

Hands on Toys kinderlieb外観＜川嶋王志撮影＞

いつもごった返していた店内がウソのように静かになる中で、あの大勢のお客さまにここまで足を運ばせていた原動力は何だったのだろうか、ネットで簡単に手に入るようになっても、わざわざ遠方から何時間もかけてやってきて「一度来てみたかった」と言って下さるのは何故か。それは本質的には日本全国から、あるいは海外からも「小樽に行ってみたい」と感じることと同じなのではないかと思うようになりました。

典型的な小樽観光のイメージには合わない店をやっていると内心感じていたのですが、「観光」という言葉にとらわれていたのかなとも思います。

合同会社健康応援社

代表　小林惠里子（こばやしえりこ）氏

■住所：小樽市花園５丁目８-４
■電話：0134-61-1342
■E-mail.kenko-oen@vanilla.ocn.ne.jp

～歴史の杵柄（きねづか）に小樽人ライフスタイルのヒントが～

私は札幌で水泳のインストラクターをしていましたが、素敵な高齢者との触れあいから、高齢者の元気を呼び戻す仕事を模索していました。となりの小樽が高齢化率40％近いと聞いて、市場は小樽と定め、小樽の空き家古民家を探して、とても素敵な建物に出会い、平成26年にこの建物で起業しました。

社会もマスコミも「65歳以上は高齢者」とベッタリとレッテルを貼っていますよね。すると65歳になると「自分はもう若くない」と自己催眠をかけてしまうのです。これがいけなくて、どんどん老けていく原因になっています。確かに対処療法の方向で介護の法律も整備され、介護施設がボコボコつくられていますが、分母の高齢者に歯止めをかける機能が、見当たりません。私は人それぞれの健康維持があると思っています。無理をして頑張るのではなく、徐々に動き柔らかくすると同時に、昔取った杵柄で得意料理、得意縫製、得意掃除など誰もが忘れてしまっていることを復活させ、しかもそれを求めている層とのマッチングをしています。肉体的にも手指や能力の維持、そして社会性が発揮できると、健康な精神が蘇るのです。

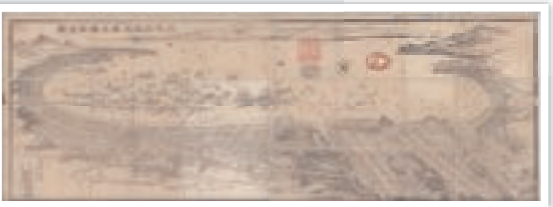
石垣のある社屋＜川嶋王志撮影＞

私たちの活動は、表面的にはレストラン運営と運動教室ですが、その狙いは『自分の健康は自分で作る』ということなのです。

小樽は歴史的に多くの杵柄を蓄えてきましたので、それを今の時代にマッチングすることが、新たな小樽人ライフスタイルになると思うのです。

「小樽市の日本遺産・日本遺産候補地域」

構成文化財地図



ここの地図は2つの日本遺産（北前船、炭鉄港）と日本遺産候補の各構成文化財を記しています。巻末のリストで色分けしていますので照らし合わせてご覧下さい。

左上：北海道後志国小樽港湾図 渡辺覚平 明治24年
左下：小樽港明細地図 明治40年
中央下：小樽区全図 小樽区 明治43年
右：現今小樽市街図 年代不明

＜写真：市立小樽図書館 蔵＞

小樽中心部
至小樽市総合博物館 本館
おたる水族館
色内ふ頭
第3ふ頭
第2ふ頭
色内ふ頭公園
小樽地方
合同庁舎
札幌法務局小樽支局
鱗友
朝市
運河公園
北浜橋
北運河
旧日本郵船株式会社
小樽支店
ゴールド
ストーン
至手宮公園
454
手宮線跡地
竜宮橋
小樽運河
中央橋
小樽市
総合博物館
運河館
運河プラザ
小樽海岸公園線（中央線）
ホテル
ノルド小樽
ホテル
ソニア
浅草橋
出抜小路
色内大通り
小樽本局
日銀通り
日
金
市立小樽
美術館
市立小樽
文学館
市民センター
マリンホール
ローソン
竜宮通り
セブンイレブン
北陸
銀行
北海道
銀行
北洋銀行
オーセント
ホテル小樽
都通り商店街
小樽港稲穂線
820
臨海線
梁川通り
ドーミーイン
サンピルスクエア
静屋通り
浅草通り
稲北十字街
5
長崎屋
第一ビル
地獄坂
龍宮神社
小　樽　駅
船見坂
天神南小樽停車場線
小樽警察署
保
年金事務所
コープさっぽろ
後志総合
振興局
小樽庁舎

港町ふ頭
中央ふ頭
小 樽 港
かつない臨海公園
田中酒造㈱
亀甲蔵
メルヘン交差点
北一ヴェネツィア
美術館
道道小樽港線（臨海線）
ふじ館
本通線
かま栄
利尻屋みのや
不老館
利尻屋みのや
本店
ルタオ
本店
オルゴール堂
本館
堺町局
堺町通り
外人坂
水天宮
セブン
イレブン
南小樽駅
至札幌市
入船通り
ローワーク
銀行街
本銀行旧小樽支店
融資料館
寿司屋通り
ーソン
サンモール
一番街商店街
ローソン
花園交番
花園銀座商店街
コープさっぽろ
セブン
イレブン
小樽協会病院
小樽
市立病院
住吉神社
嵐山通り
小樽港フェリーターミナル
マリンウェーブ小樽
シーポート
マーケット
小樽温泉オスパ
新倉屋本社・工場
グランドパーク
小樽
ウイングベイ小樽
小樽築港駅
至小樽市街
至札幌市
済生会
小樽病院
消防署
潮見ヶ岡神社
札樽自動車道
ガソリン
スタンド
ガソリン
スタンド
勝納川
総合福祉
センター
健所
小樽潮見台
小学校
南小樽病院
至 天狗山
緑町局
龍徳寺
小樽潮陵高校
築港エリア

構成文化財地図

塩谷エリア
セイコーマート
塩谷小学校
塩谷郵便局
小樽迎浜館
塩谷駅
1173
956
おたる水族館
ホテルノイシュロス小樽
日和山灯台
小樽龍御殿
青塚食堂
祝津マリーナ
にしん御殿 小樽貴賓館（旧青山別邸）
祝津局
454
高島局
長橋・なえぼ公園
手宮公園
手宮緑化植物園
湯の花手宮殿
手宮洞窟
小樽市総合博物館 本館
北洋銀行
マックスバリュ
ラッキー
スーパーチェーンシガ
小樽北防波堤
至余市町
小樽駅
小樽港
祝津・高島・手宮エリア
17
至札幌市

至 余市町
至 祝津方面
手宮緑化
植物園
手宮公園
湯の花
手宮殿
手宮洞窟
小樽市総合
博物館 本館
小樽
北防波堤
小樽港
小樽駅
小樽港
南防波堤
南小樽駅
小樽
築港駅
至 札幌市
天神十字街
ロープウェイ
天狗山
スキー場
天狗山
ロープウェイ
天狗山
小樽天狗山
山頂
レストハウス
奥沢水源地
天狗山・奥沢エリア

構成文化財地図

北前船

①	日和山		
②	北浜地区倉庫群	①	旧右近倉庫
		②	旧広海倉庫
		③	旧増田倉庫
		④	旧大家倉庫
		⑤	旧小樽倉庫
③	旧魁陽亭		
④	住吉神社奉納物		
⑤	船絵馬群	⑥	恵美須神社
		⑦	龍徳寺金比羅殿
		⑧	徳源寺龍神堂
		⑨	塩谷神社
⑥	北前船関係古写真		
⑦	西川家文書		

炭鉄港

①	小樽港北防波堤
②	北炭ローダー基礎
③	色内銀行街（旧三井物産及び旧三菱商事小樽支店）
④	手宮線跡及び附属施設
⑤	旧手宮鉄道施設
⑥	小樽中央市場

北海道の心臓

①	天狗山からの眺望（小樽港）		
②	旧手宮鉄道施設［国指定重要文化財］		
③	小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群		
④	旧手宮線散策路		
⑤	小樽港北防波堤		
⑥	小樽港湾事務所みなとの資料コーナー所蔵防波堤関係資料（波力公式を含む）		
⑦	北浜地区倉庫群	①	市指定歴史的建造物第１号旧大家倉庫
		②	市指定歴史的建造物第13号旧小樽倉庫
		③	市指定歴史的建造物第20号旧澁澤倉庫
		④	市指定歴史的建造物第22号旧増田倉庫
		⑤	市指定歴史的建造物第65号旧右近倉庫
		⑥	市指定歴史的建造物第66号旧広海倉庫
⑧	南浜地区倉庫群	⑦	市指定歴史的建造物第21号旧木村倉庫
		⑧	市指定歴史的建造物第42号旧嶋谷倉庫
		⑨	市指定歴史的建造物第51号旧高橋倉庫
⑨	旧岡崎倉庫（３棟）		
⑩	旧日本郵船株式会社小樽支店及び附属倉庫群［国指定重要文化財］		
⑪	日本銀行旧小樽支店		
⑫	旧三井銀行小樽支店［国指定重要文化財］		

⑬	色内銀行街	⑩	旧小樽地方貯金局
		⑪	市指定歴史的建造物第５号旧百十三銀行小樽支店
		⑫	市指定歴史的建造物第６号旧北海道銀行本店
		⑬	市指定歴史的建造物第９号旧百十三国立銀行小樽支店
		⑭	市指定歴史的建造物第18号旧三菱銀行小樽支店
		⑮	市指定歴史的建造物第19号旧安田銀行本店
		⑯	市指定歴史的建造物第24号旧第一銀行小樽支店
		⑰	市指定歴史的建造物第25号旧第四十七銀行本店
		⑱	市指定歴史的建造物第30号旧三井物産小樽支店
		⑲	市指定歴史的建造物第31号旧北海道拓殖銀行小樽支店
⑭	色内通り、 堺町通りの商店	⑳	市指定歴史的建造物第７号旧名取高三郎商店
		㉑	市指定歴史的建造物第8号旧岩永時計店
		㉒	市指定歴史的建造物第15号旧早川支店
		㉓	市指定歴史的建造物第17号旧共成㈱
		㉔	市指定歴史的建造物第23号旧上勢友吉商店
		㉕	市指定歴史的建造物第33号旧久保商店
		㉖	市指定歴史的建造物第34号旧金子元三郎商店
		㉗	市指定歴史的建造物第36号田中酒造店
		㉘	市指定歴史的建造物第52号旧荒田商会
		㉙	市指定歴史的建造物第68号旧塚本商店
		㉚	市指定歴史的建造物第72号旧小堀商店
		㉛	市指定歴史的建造物第80号旧前堀商店
		㉜	市指定歴史的建造物第83号旧磯野支店倉庫
		㉝	市指定歴史的建造物第85号旧北海雑穀株式会社
⑮	旧小樽商工会議所		
⑯	ＪＲ小樽駅本屋及びプラットホーム		
⑰	繁栄期の料亭、 ホテル建築群	㉞	市指定歴史的建造物第２号旧魁陽亭
		㉟	市指定歴史的建造物第16号旧越中屋ホテル
		㊱	市指定歴史的建造物第79号旧光亭
⑱	小樽運河		
⑲	奥沢水源地水道施設		
⑳	運河完成後の倉庫群	㊲	澁澤倉庫
		㊳	市指定歴史的建造物第63号旧篠田倉庫
		㊴	市指定歴史的建造物第77号旧浪華倉庫
㉑	北海製罐倉庫㈱事務棟、工場、倉庫		
㉒	小樽市総合博物館所蔵9.5ミリ動画資料		
㉓	中村善策作風景画		
㉔	小樽運河を守る会関係資料		
㉕	藤森茂男作風景画		
㉖	兵庫写真コレクション		

「参考文献」に記述した新聞の発行年数は以下の範囲から複数の記事を参考としています。

・函館新聞　　明治11(1878)年～明治20(1887)年
・北海道毎日新聞→北海タイムス　明治21(1888)年～昭和17(1942)年
・小樽新聞　　明治28(1895)年～昭和17(1942)年
・北海道新聞　昭和17(1942)年～平成27(2015)年
・北海タイムス(一部)　昭和22(1947)年～平成12(2000)年

伝えずには　いられない

小樽市日本遺産磨き上げ推進事業　調査報告書

北海道の「心臓」と呼ばれたまち・小樽

～「民の力」で創られ蘇った北の商都～

とっておきの解説集

■発行日：令和４(2022)年３月
■発行者：小樽市日本遺産推進協議会
■調査・執筆・編集・印刷：株式会社 石井印刷
■問合せ：小樽市日本遺産推進協議会事務局
〒047-0007　小樽市港町４番３号　小樽市産業港湾部観光振興室日本遺産担当
電話：0134-32-4111(内7451)　Mail：kanko@city.otaru.lg.jp

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和３（2021）年度文化財芸術振興費補助金
（地域文化財総合活用推進事業）